

いわゆる末期古墳の系譜と変容

The Genealogy and Revolution of the Latest Stages Tombs (*Emishi-style*)

八木光則

YAGI Mitsunori

はじめに

①末期古墳の系譜

②周湟墓からみる社会の変容

③栗原等五地域の“末期古墳”の検討

おわりに

【論文要旨】

6世紀末から10世紀にかけて、東北北部から北海道央ではいわゆる末期古墳が造られていた。90年近い末期古墳の研究史の中で、近年特に注目されている三つのテーマについて再検討を行った。

一つは末期古墳の系譜を東国に求める動きに対してである。検討の結果、青森県八戸地域と岩手県胆沢地域とは別系譜であることが認められた。八戸地域では無煙道～短煙道竈の堅穴住居跡と横穴式石室を模したような張り出しをもつ土壙型末期古墳が多くみられ、関東からの影響が強いこと、側壁挾込土坑が分布することから常総地方などに系譜が求められることが考えられた。

胆沢地方では、竈焚口に長礫を横架する構造を福島県南部などから受容しているが、土壙型は伸展葬と墳丘という広く古墳文化の影響を受けながら、伝統的な土壙墓が変革されたものと考えられた。川原石積みの礫槨型は関東西部などからの影響の可能性を確認するにとどまった。

東北北部以北の蝦夷社会成立にあたっては東国からの影響が大きかったが、一方で移民を示すような関東系土師器は僅かで、多くの人々の移住や移民は想定できないことも明らかになった。

二つめは、主体部を残さない形の末期古墳（周湟墓）の位置づけである。8世紀後葉以降に大規模な古墳群が減少し、また中規模の墓域が集落の一画に造られ、さらには数基の家族墓的なあり方に変化する。村落での墓域共有の理念が失われ、集落ごと、家族ごとで墓域を形成するようになった。この背景として8世紀後半の堅穴住居総数の減少があり、地域社会の大きな変革期であったことがあげられる。

三つめは、岩手県南端や宮城県北端の地域（栗原等五郡域）の群集墳が北上盆地の礫槨型末期古墳とは異なることを指摘した。群集墳築造は柵戸移民や城柵造営、三十八年戦争などにもなっており、在地住民が郡司などの役職に就き、群集墳の葬制を取り入れたことが想定される。

以上、末期古墳をととして、蝦夷社会の成立や変容、陸奥中部北端での内国化の様相を考察した。

【キーワード】 蝦夷社会、東北地方、末期古墳、周湟墓、群集墳

はじめに

北日本の古代社会は大きく南北三つの地域に区分される。東北南部は宮城県の阿武隈川下流域や新潟平野より南の地域で、関東、中部地方とほとんど変わらない国郡制の中で人々の生活が営まれていた。東北中部は仙台～大崎平野と山形県域で、蝦夷の地域とされたが、人々の生活は南側と基本的に変わず、また東国移民が行われ、次第に内国化が進んだ地域である。東北北部は岩手県胆沢地域や秋田県南端から北海道中央部にかけての地域で、古墳時代の竪穴住居による定住生活がいったん途絶え、古代になって定住集落の再開や新たな墳墓が築かれ始める地域である。このうち東北中部は「南部蝦夷社会」、東北北部以北は「北部蝦夷社会」に位置づけられる〔八木 2010-p258〕。

北部蝦夷社会を特徴付けるのはいわゆる末期古墳である。「末期古墳」という語は蝦夷が埋葬された古墳様の墳墓の意味として使われており、古墳文化の王権に連なる古墳とは異なるというのが一般的理解である。ただ末期古墳の系譜を古墳文化の群集墳に系譜を求める動きもあり〔高橋信雄 1996-p343, 松本 2011-p114～115, 林正之 2015〕、古墳文化の古墳との形態的差異も明確ではなく、必ずしも適切な用語とはいえない。本稿ではこれまでの学史を重んじ、「末期古墳」とするが、今後検討を要するものと考えている。

ところで、近年末期古墳の研究に三つの新たな動きが顕在化してきている。一つは末期古墳の系譜を東国に求める動きである。末期古墳のみならず、北部蝦夷社会の成立に関わる問題でもある。二つめは周湟墓や円形周溝と呼ばれる主体部を残さない形の末期古墳が大きく取り上げられるようになり、末期古墳の終焉や蝦夷社会の変容を考える上で重要な問題となっている。三つめは岩手県南端や宮城県北端の地域の群集墳の位置づけの問題で、末期古墳の範疇、ひいては南北の蝦夷社会境界領域の地域相をどうとらえるかという問題とも重なる。

「末期古墳」の時期変遷については、副葬品等の出土がなく個々の時期決定が難しい遺構が少なくないが、概ね次の時期区分が可能である〔八木 2007-p94, 2010-pp108～111〕。

第1期＜初源期＞ 6世紀末～7世紀前葉

- ・北上盆地中央部（岩崎・上田・西根道場古墳群）・八戸周辺（阿光坊古墳群）で出現
- ・副葬品は7世紀型副葬品（馬具・鉄鏃・鐙子・提瓶・土師器甕など）

第2期＜拡大期＞ 7世紀中葉～8世紀前葉

- ・三陸（房の沢・長根古墳群）・石狩低地帯（恵庭古墳群）への拡大
- ・副葬品は7世紀型副葬品（金銅製馬具・「北の方頭」・錫・湖西産須恵器が加わる）

第3期＜転換期＞ 8世紀前葉～8世紀中葉

- ・礫槨型の形態発展（立石や仕切り石を設置）
- ・8世紀型副葬品への転換（和同開珎・鈔幣・藤手刀・須恵器長頸瓶など）

第4期＜拡散期＞ 8世紀後葉～10世紀前葉

- ・周湟墓へ転換 土墳・礫槨型の地域で周溝墓へ移行、秋田・津軽への普及
- ・供献品は9世紀型供献品（須恵器長頸瓶・坏・石鈔幣・唐様大刀）

本稿では、上の三つのテーマについて、第1期と第4期を対象に論を進めていく。

なお地域区分の呼び方は、青森県八戸市やおいらせ町などを八戸地域とし、その他の地域は後の郡名を使用する。平野や盆地は適宜通称されている呼び方で表記していく。

①……………末期古墳の系譜

(1) 末期古墳の成立

1) 系譜を中心とした研究史

末期古墳は主体部の構造から大きく土壙（木槨）型と礫槨型とに分かれる。

礫槨型は、すでに江戸時代から「蝦夷塚」として注目されてきた。記録には礫槨と副葬品である蕨手刀や方頭大刀、勾玉が描かれている⁽¹⁾。1950年代以降発掘調査が行われ、広く北上盆地の古墳の存在が知れ渡るようになった。

土壙型は、岩手県岩手町の浮島古墳群が墳丘をもつ古墳群として知られ、1920年に調査されている。北海道では1931年に江別市江別古墳群の後藤遺跡で古墳様墳墓が発掘され、後に後藤守一氏により「北海道式古墳」と命名された〔野村 2000-p277〕。

1950年代以降に青森県八戸市鹿島沢古墳群や岩手県北上市江釣子古墳群などが調査され、発掘にもとづいた資料が増えるようになる。

「末期古墳」の命名者である石附喜三男氏は、東北北部の末期古墳を、川原石を小口積みにした石室を有するもの（礫槨型）と土壙を主体部としたもの（土壙型）とに分け、東北経営勢力の北上すなわち城柵の造営が文化的刺激をもたらし、現地社会で末期古墳が成立したと考えた〔石附 1965-pp24～25・29〕。そして末期古墳を造った蝦夷が北海道に渡来し、北海道の古墳の造り手になったとしている〔石附 1966-pp253～255〕。東北北部の末期古墳は蝦夷によるものという認識に立っていたことがわかる。

礫槨型について、従来は漠然と宮城県以南の横穴式石室の影響を受けて成立したと解釈されていたが、高橋信雄氏は宮城県色麻町色麻古墳群の横穴式石室の主流は胴張りで、末期古墳とは系譜を異にするとし、横穴式石室の羨道部を模しながらも上部から埋葬する形で、追葬ができない古墳と



図1 末期古墳の分布

した〔高橋信雄 1987-p33・同 1996-p219〕。

高橋氏はまた、土壙タイプを7世紀からの開始、川原石積みの石室は8世紀を中心とする時期ととらえ、前者は東北北部の伝統的な形態、後者の系譜を群馬県北部山間地域、埼玉県秩父地方、東京都多摩丘陵、さらには新潟県頸城地方の川原石積み古墳や蕨手刀に関連性を求めた〔高橋信雄 1996-pp334～343〕。特に多摩の瀬戸岡古墳群は牧を管理していた渡来系の移住民の群集墳として、馬産とのつながりについても示唆している。そして川原石積み古墳は限定された地域で比較的短期間であることから移住者による可能性を指摘している。

筆者は土壙型初源の岩手県北上市岩崎古墳群で黒曜石製石器が共伴したことを根拠に、続縄文期の土壙墓を母胎に墳丘を持つ古墳へ変遷すると考えた〔八木 1996a-pp76～77〕。礫槨型については東北南部以南の横穴式石室を模倣する形で礫槨型をつくりあげたとし、その出自については深く言及してこなかった〔八木 1996a-p77〕。

五十嵐聡江氏は、末期古墳の形態分類、変遷、副葬品の検討を通じて蝦夷社会を大中小の重層構造でとらえている〔五十嵐 2004-pp1～22, 同 2005-pp31～60〕。この段階で末期古墳の系譜については述べていないが、山田町房の沢古墳群の分析をとおして、同古墳群の被葬者を北上川流域からの移住者とした〔五十嵐 2018-pp151～158〕。また副葬品としての土師器坏について、「続縄文」時代後半の合口土器の埋納に系譜を求めている。

辻秀人氏は東北南部の横穴式石室をもつ群集墳が祖型で、複数埋葬を個人埋葬に置き換えたと考えている〔辻 1996-p242〕。

高橋千晶氏は横穴式石室としてその変遷を組み立て、羨道部がハの字形に開くタイプを古くみて、その後が続く副葬品の鉄器などから編年、年代を試みた〔高橋千晶 1997〕が、後に年代も含め修正している〔高橋千晶 2017-pp228～245〕。そして北上市江釣子五条丸支群を分析し、土壙型はおいらせ町阿光坊古墳群に類例を求めることができ、礫槨型では追葬が行われていないことから石室造営技術のみを導入し、埋葬頭位が古い北上市岩崎古墳群と同じであることから、土壙型、礫槨型ともに被葬者を在地集団に求めている〔同 p235〕。

藤沢敦氏は末期古墳と倭国域との古墳の相違点を強調する〔藤沢 2015-pp208～213〕。築造時期が7世紀末～8世紀初頭で終焉を迎える倭国域に対し、末期古墳はその後にも継続し、連動していないこと、倭国域が前方後円墳と小規模な円墳などとの間の格差が明確であるが、末期古墳は被葬者相互の階層的関係をもたずに並列していることに大きな特徴があるとしている。

高橋和成氏は、初期の末期古墳が地下に埋葬施設を設け、黒曜石を出土することから続縄文時代の墓制の延長線上にあるとして、東北北部独自の墓制であるとする〔高橋和成 2019-p21〕。

これら在地からの系譜や東北南部以南からの影響という説に対し、東国に系譜を求めようとする動きも再燃してきている。松本建速氏や林正之氏は、屈葬の続縄文期土壙墓から伸展葬の末期古墳への転換は考えられないとし、具体的な出自を明らかにした。松本氏は、土壙型は礫を用いず積石塚的な墓を築いたか、墓穴をもつ無袖横穴式石室の派生形とし、土壙型と礫槨型とを問わず、関東、中部地方に類例を求めている。〔松本 2011-p115〕。氏は蝦夷そのものが移住者で成り立っていることを前提としている。

林氏は土壙型について、地下式堅穴系埋葬施設は古式群集墳や山形県の箱式石棺の例から古式群

集墳の遺制が新たに展開した可能性が高く、また常総中央部の竪穴系埋葬施設の片岩・砂岩・木製の棺材が土壙系末期古墳の木棺となったとしている〔林正之 2015-pp65～68〕。また礫礫系末期古墳が、関東西部、東海道の内陸側の地下式～半地下式無袖式石室に類似し、仙台市安久東遺跡の川原石積半地下式無袖式石室は末期古墳に酷似するとし、多摩地域の無袖式礫礫が仙台平野を經由して北上盆地に入ったと想定している〔同-pp72～78〕。そして古墳文化圏に系譜をもつ「中間層」など多様な人々が馬産と関連し東北北部には多数入り込んでいたと結論づけている。

このように、「末期古墳」の系譜をめぐる近年の動向は、まだ在地の蝦夷の墳墓とする説も根強くある中で東国に出自を具体的に求める説も出てきている。従来の説はあまり東国の知見に注意せず、北海道から東北の範囲で解釈し、系譜について議論が十分に行われてこなかったきらいがある。一方東国に系譜を求める説についても、「続縄文」期の土壙墓との関係について少し議論が足りないように思われる。

2) 土壙型初源期の様相

ここであらためて東北北部～北海道の「末期古墳」を再検討し、東国出自説を考えてみることにする。

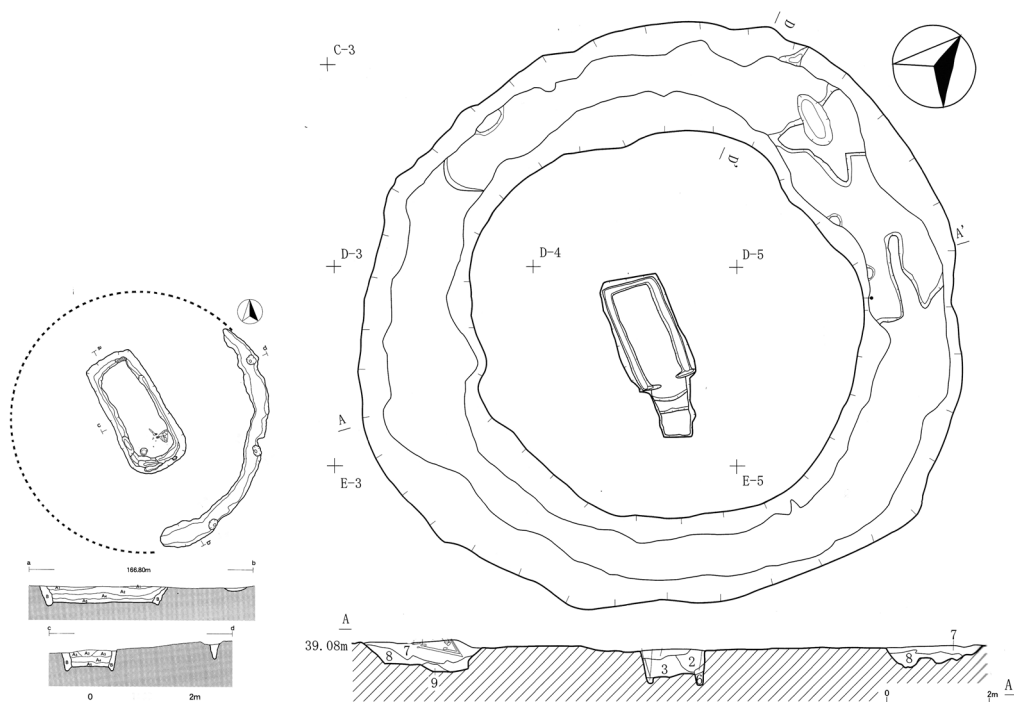
まず土壙型の初源期の年代を確認しておきたい。主体部の構造のわかる 156 基をみたところ、初源期に位置するのは 6 世紀末～7 世紀前葉の阿光坊、上田蝦夷森、岩崎古墳群である。このうち岩崎古墳群は出土土師器が 6 世紀末～7 世紀初頭、上田蝦夷森 1 号墳は 7 世紀前葉の年代を示している。阿光坊古墳群では、7 世紀前葉の須恵器平瓶が a2 号土壙墓の礫上と A11 号墳主体部から出土しているが、後者には 7 世紀中葉の土師器が共伴している。a2 号墓も伝世の可能性があり、この古墳群の開始はやや遅れることも考えられる。

次に主体部の分類について、筆者や五十嵐氏、林氏が類似の分類を行っている〔八木 1996a-pp71～73・五十嵐 2004-pp2～4・林正之 2015-pp55～58〕。林氏は壙底の溝の有無を優先し、筆者は平面形状を優先する分類であるが、それぞれの要素を再編すると次のようになる。

- | | |
|------|-----------------------------------|
| 平面形状 | I - 長方形短辺部の斜めの張り出しあり |
| | II - 長方形短辺部の張り出しなし |
| 壙底施設 | a - 壙底に小礫を敷くもの |
| | b - 壙底に木炭を敷くもの |
| | c - 壙底の四周または三辺に木材を据える周溝をもつもの |
| | d - 壙底の短辺側に 1～2 条の木槨側板を据える横溝をもつもの |
| | e - 壙底に施設をもたないもの |

主体部の構造をみると、張り出しをもつものは、岩崎古墳群や後出の江釣子古墳群、岩手県矢巾町藤沢狄森古墳群の数例を除き、2 期以降も含めて阿光坊と丹後平古墳群に多くみられ、地域性の強い形状である。張り出しは横穴式石室の羨道を意識したものとの指摘はその通りであろう。

壙底に小礫や木炭を敷くものは 1 期にはみられず、2 期以降になってあらわれ、やや新しい要素である。四周溝は木槨側板を据えるための溝と考えられ、1 期から多くみられる。壙底の溝は四周溝は直線のものと曲線や隅丸になるものがあり、前者は平板な横板を据えることができるが、後



左：岩手県盛岡市上田蝦夷森1号墳

右：青森県おいらせ町阿光坊古墳群 A6 号墳

図2 土壇型初源期の末期古墳

者は幅の狭い縦目の側板，縦板が用いられたとみられる。岩崎古墳群や上田蝦夷森古墳群では丸みを帯びるものがほとんどで，阿光坊古墳群では直線的になる。7世紀中葉になると八戸地域でも短辺側張り出しの構造を残しながら，隅丸長方形が採用されるようになる。

このように，1期では羨道状の張り出しが横穴式石室を意識したもので，八戸地域に多くみられること，また墳底四周溝は，八戸地域では横板側板，北上盆地では幅の狭い縦板が木槨の材として使われていたことを確認することができた。

いずれも土層断面で側板痕跡の認められない例が多数を占め，木の皮のような脆弱で朽ちやすい素材が多かったか，裏込め土がしっかり詰め込まれていなかったと考えられる。なお，7世紀前～中葉の北海道恵庭市西島松5遺跡の楕円形土墳墓には裏込め土が確認されものが多く，縦板による木槨が「続縄文」後半期の墳墓にも用いられており，関連性が注目される。

3) 礫槨型初源期の様相

礫槨型は，北上盆地に限られる。北限は盛岡市玉山の永井古墳群，南限は奥州市蝦夷森古墳群である。なお鹿角市の古墳は実態が不明のため，本稿では検討から除外することとする。

まず初源年代であるが，礫槨型は土器の副葬がきわめて少なく，年代決定の根拠に欠けることが多い。その中で金ヶ崎町西根道場4号墳出土の土師器が，実物を現在確認することができないが，6世紀末～7世紀前葉とみられることから古く位置づけられる〔八木 1996a-p68〕。また道場古墳群で出土古墳を特定できない須恵器提瓶は肩部に半環状の双耳が付けられている。口縁部を欠き，年

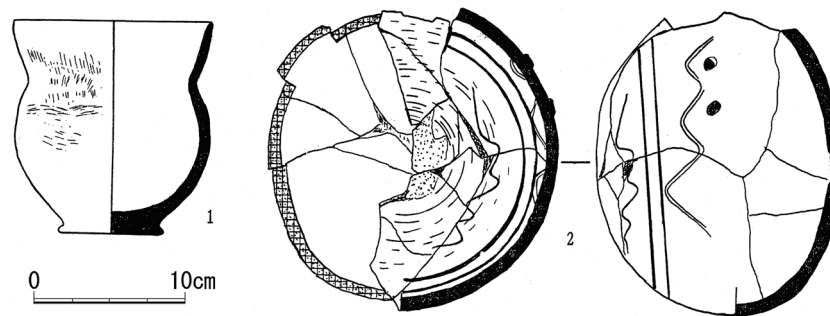


図3 岩手県金ケ崎町西根道場支群出土土器 1-4号墳 2-支群内
 [金ケ崎町教育委員会 1968『西根古墳と住居址』第13図より]

代の特定が難しいが、提瓶が陶器ではMT15～TK209間の製作といわれ[田辺 1981-p41]、新しくみても7世紀前葉となる。

鉄製品では江釣子古墳群五条丸69号墳の無窓倒卵鐔（丸鞘か）の下限は7世紀中葉、52号墳の方頭横刀は方頭の丸みが強く、鞘も丸鞘になるとみられ、やはり7世紀中葉前後に位置づけられる。このほか鉄鍬や馬具なども概ね7世紀代の大まかな区分におさまるものである。

礫櫛型の開始年代は、道場古墳群が礫櫛型で最も古い年代を示しており、6世紀末～7世紀前葉に位置づけられる。土壙型の開始と大きな年代のずれはないと考えられる。

礫櫛型の形状分類について、旧地表面近くに設置されることが多いため、墳丘の削平とともに礫の原位置が移動している場合があり、大まかな分類となる。

礫櫛内部の規模 a - 礫櫛内部の長さが2～2.5m前後

β - 礫櫛内部の長さが3m以上

礫の積み方 a - 堅穴状掘込みをもつ半地下式

b - 川原石を平積みにするもの

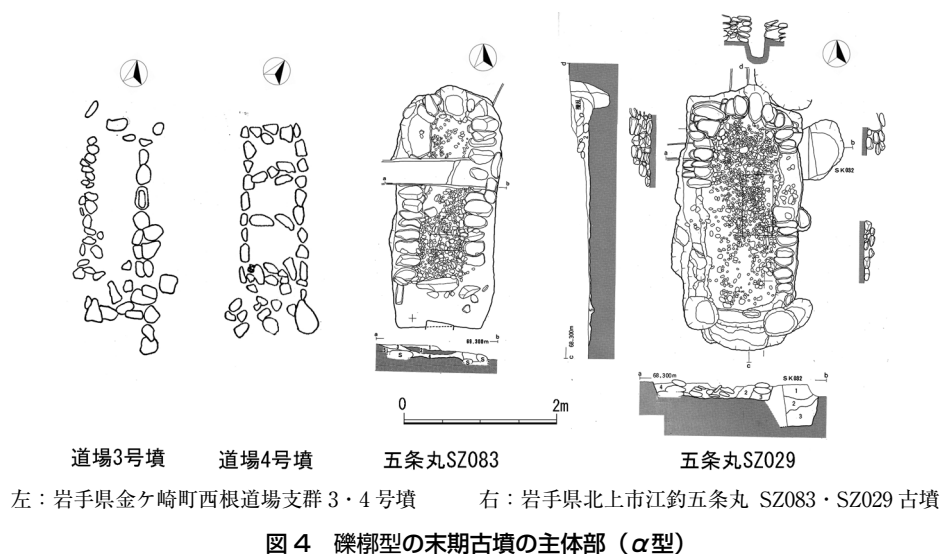
c - 川原石を小口積みにし、側壁に立石をもたないもの

d - 川原石を小口積みにし、側壁に立石や床に仕切石をもつもの

a型にはc・d型がほとんどみられない。a a型の江釣子古墳群猫谷地SZ029、五条丸SZ083・SZ101は堅穴状掘込みの底面から礫を積んでおり、SZ029は礫積み5段が認められる。残存が良くないためはっきりしないところもあるが、入口状施設は認められず、SZ101の両端が小口積みされており、a a型は両端が閉塞する堅穴式の礫櫛に復元される（半地下式堅穴式礫櫛）。五条丸69号墳も同規模で、堅穴状掘込みを伴っていた可能性が考えられる。床に小礫を敷き詰めるものとないうものがみられる。

a b型は西根道場3・4号墳が該当する。ともに川原石で主体部の輪郭をなぞるように平積み1段のもので、礫積みの最下段が残存するだけで上部は耕作等で削平されたものであろう。床面には砂が敷かれ、周湟開口部側の短辺部は礫の配置が乱れており、横穴式石室を意識した入口状施設があった可能性がある。4号墳は床に仕切り石状の石が不整に並べられている。

β型にはa・b型がなく、β c型から類例が増える。堅穴状掘込みは確認されておらず、また横穴式石室を模したように一端が閉塞せず、無袖式羨道状になるものも少なくない。時期は7世紀中葉以降となる。またβ c型はβ d型に先行することがこれまでに明らかになっている[八木 1996a-



p75, 岩田 2016-p26]。

年代を追える中で $\alpha a \cdot \alpha b$ 型は礫槲型の中でも古く位置づけられる一群で7世紀前～中葉となる。 βc 型は7世紀中葉以降、 βd 型は8世紀前葉以降である。

(2) 末期古墳初源期の東北北部の集落

1) 東南北部における東国からの影響

ここで視点を換え、集落などから東国の影響について整理しておきたい。東南北部では、6世紀末～7世紀前半に仙台平野などで関東系土師器がみられるようになるが、その出自は千葉、茨城、栃木県といわれる [村田 2007-p138・佐藤 2007-p180]。仙台市清水遺跡や栗原市泉谷館遺跡では須恵器模倣坏が内面ナデ調整で漆仕上げ、甕は体部ケズリ調整が行われるものや、口縁端部が直立する常総型甕がみられる。泉谷館遺跡は現在栗原市南端に位置するが、古代においては長岡郡域と推定され、大崎平野の各郡に隣接している。

多賀城市山王遺跡と仙台市南小泉遺跡ではこの時期に柵囲集落⁽²⁾が形成される。関東系土師器は山王遺跡では僅かであるが、竪穴住居の竈は関東系の無～短煙道が8割を占めている。長煙道が一般的な地域の中で異質な竈構造となっている。南小泉遺跡では関東系土師器が主体を占めており、関東からの移民が想定されているが、両遺跡ともその後の官衙などへの継続がない。また仙台市長町駅東遺跡は住居が密集する集落が形成され、関東系土師器が在地系とほぼ同量出土している。7世紀中葉には柵囲集落となり、隣接地には郡山官衙が造営され、7世紀前半は官衙造営への前段階として移民を伴う集落形成に位置づけられる。

このように、仙台～大崎平野では常総や下野地域などからの移民を伴う東国勢力の動きがあった。

2) 東北北部の古代集落の開始

仙台平野に関東系土師器が出現する時期に、東北北部でも古代集落が形成され始める。それ以前

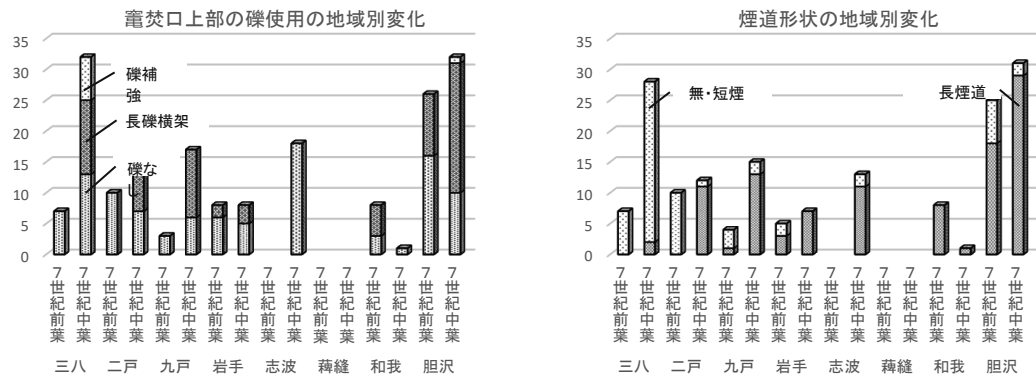
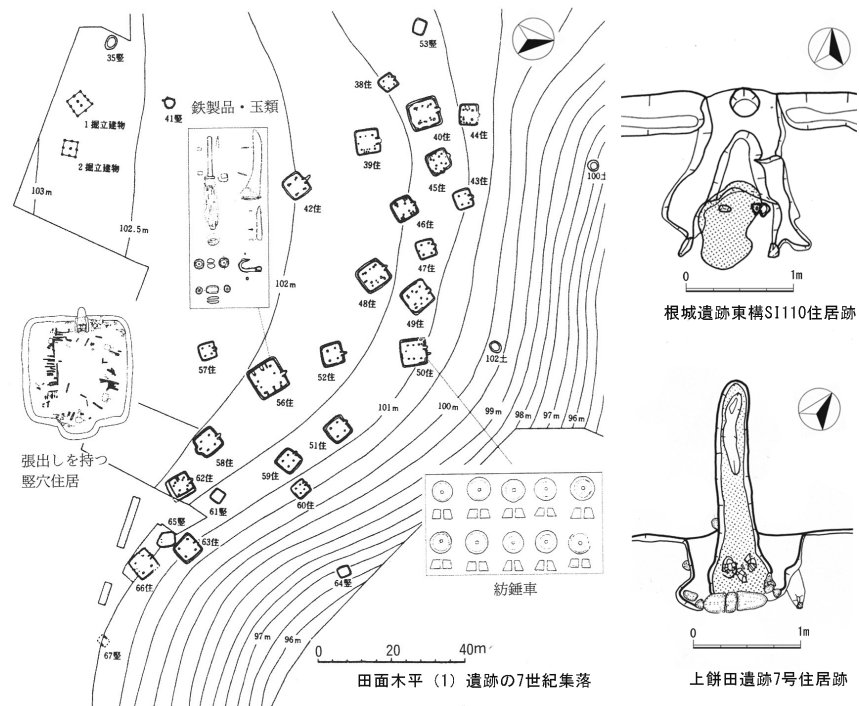


図5 竈の形態の地域差



左：岩手県八戸市田面木平 (1) 遺跡の7世紀集落
 右上：青森県八戸市根城遺跡東構地区 SI95 住居跡
 右下：岩手県金ケ崎町上餅田遺跡7号住居跡
 [宇部則保 2007「古代東北部社会の地域間交流」
 『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館 図6]

図6 初源期の古代集落と竈の形態差

の4～6世紀は竪穴住居跡が検出されず、遊動生活であったとみられている。八戸周辺では5世紀後葉～6世紀前葉の古墳時代集落が確認されているが、その後中断し、6世紀末頃に新たに集落が形成されるようになる。6世紀末～7世紀前葉にほぼすべてが無～短煙道の竈で構成されている。

この竈の形態は馬淵川をさかのぼる二戸地域や小河川越しにつながる九戸地域でも認められる。中葉になると八戸で僅かに長煙道が出現するが、二戸や九戸では長煙道への転換が先行し、後葉には八戸地域でも長煙道が主体となる。

胆沢地域でも5世紀後半に角塚古墳の前方後円墳や沢田遺跡の群集墳が築かれ、中半入遺跡などの集落も営まれたが、6世紀中葉～後葉の集落は中断あるいは稀薄になっている。そして6世紀末には古代集落が形成され始める。それ以前の長煙道の竈を継承しているためか長煙道が主体を占め、八戸地域とは対極的である。

胆沢地域の新たな竈の構造は、50～60cmの長い礫を焚口の天井部に横架する形状（長礫横架）が特徴的である。左右の側壁部分の立石で水平の長礫を支える^{まぐさ}楣式構造を呈するものと、側壁に立石がないものがある。6世紀末～7世紀前葉で約半数、中葉で2/3の竈で確認することができる。地域的には前葉で北上川上流部の岩手まで、中葉には八戸地域にまで受容され、川原石数個で焚口上部を補強するものも現れている。7世紀後葉になると各地で急減するので、胆沢から北に向かって一時的に広く盛行した形状といえる。⁽³⁾岩手地域では無～短煙道と長煙道とが混在しており、長礫横架型も7世紀前葉からみられ、南北両地域の特徴の接触地域となっている。

このように、古代集落が開始される6世紀末～7世紀前葉には長煙道主体で焚口に長礫横架を施す竈が半数となる胆沢地域、無～短煙道で長礫横架が導入されない八戸地域が対極にある。このことは胆沢と八戸地域で異なる系譜のもとに古代集落の形成のそれぞれの基点となったことを示している。

3) 東北北部での関東からの影響

無～短煙道が広く関東地方の影響を受けたものと一般に言われており、八戸地域は関東地方の影響を反映したものであることは、宇部則保氏の指摘のとおりである〔宇部 2007-p120・同 2019-p19〕。八戸市根城東構地区やおいらせ町立蛇（1）遺跡の円筒土製品は関東などに類例が求められる遺物もあり、竈構築材に使用されたりしている。また丹後平古墳群（丹後平（1）遺跡を含む）では側壁挟込土坑（地下式横穴）が12基確認されており、千葉県などに多く分布することからその地域との交流が考えられている〔宇部 2007-p125〕。

胆沢地域の長礫横架型の竈は、福島県南部に類例がみられる。天栄村舞台遺跡は6世紀後半の舞台式の標式遺跡であるが、竈構造の残る10棟のうち8棟に凝灰岩切石や割石が焚口上部に設置されていた。類例はいわき市応時・水品・大場D・タタラ山遺跡、西白河郡東村佐平林・大信村北大久保B・C・泉崎村滝原前山C遺跡、石川郡石川町薬師堂・上悪土、岩瀬郡天栄村山崎遺跡などで浜通りと中通りの南部で確認されている。いわき市ではシルト岩、石川町では花崗岩が用いられ、タタラ山遺跡では直方体粘土が横架されている。時期は6世紀前半から9世紀までであり、6世紀後半が最も多い。長煙道と無煙道が混在し、竈本体が一部壁外に張り出す張出竈もみられる。

栃木県でも那須郡那賀川町古館・三反田遺跡、芳賀郡市貝町北ノ内・高林遺跡、さくら市小鍋内Ⅱ遺跡など、県中央東部に類例がみられる。ただ1遺跡1～2棟と出現割合は少ない。凝灰岩切石や砂岩割石が用いられており、無煙道や短煙道で長煙道はみられない。

したがって、胆沢地域の長礫横架は、福島県南部からの影響を第一に考えることができる。なお、石材については胆沢では川原石であるが、各地で調達できる石材を用いているので、礫の形状はさほど問題にはならないと思われる。

次に土師器から関東の影響を考えてみたい。東北南部で観察された関東系土師器は東北北部にく

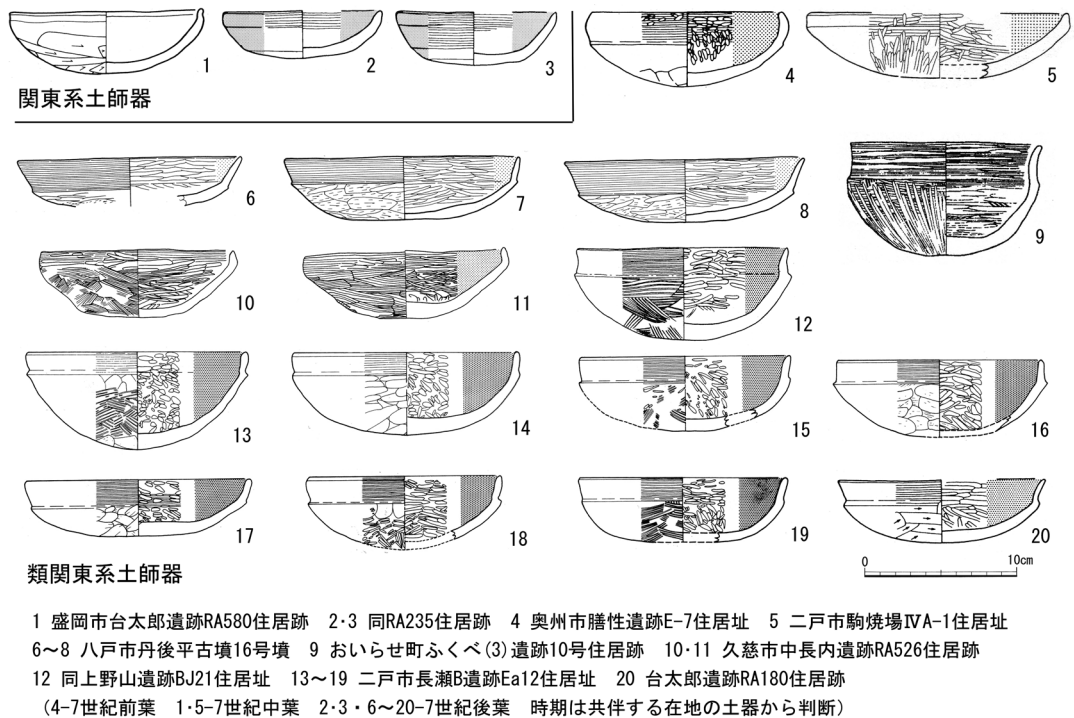


図7 東北部の関東系土師器と類関東系土師器

るときわめて限定的となる。7世紀中～後葉の関東系土師器が盛岡市台太郎遺跡で出土しているが、八戸市丹後平古墳群や二戸市長瀬B遺跡では関東系土師器の器形にミガキ手法や内黒処理などが施され、これらの地域では在地化している。出土数も少なく、各地に散在する程度である。器形に関東系の影響を残しながら製作技法で在地化している土師器を「類関東系土師器」と呼ぶこととしたい。

土師器にミガキが多用される製作技法は古代集落成立以後、東北部の地域性として確立していく。坏は口縁部が内湾気味に外反し体部は大きな段をもたず、器面調整は内外面にミガキ調整が施され、甕は底部が直立気味に立ち、ミガキ手法が一般化する。これらに関東地方や東北南部的要素は認めがたく、かえって甕の直立気味の底部は北海道の「続縄文」土器に通じる点もあり、独自の地域性が醸成されていたことは明らかである。

これらのことから、八戸地域などで関東地方からの移住者や移民を示す遺物面での根拠に乏しいことが確認される。したがって古代集落成立期の竈構造には関東などの強い影響を受けて造られたものであるが、多数の移住者、移民が自らの生活の場として集落を営んだのではなく、在地住民に住居建築の技術の伝播をしたと考えるのが妥当であろう。もちろんそれらには一定数の人々の移動を伴ったものとみられる。そして八戸地域で確立された住居構造が周辺の二戸や九戸地域に流域を通じて波及していく。

以上のことは、末期古墳についても胆沢と八戸地域で出自が異なる地域からの影響あるいは受容のあり方が異なっている可能性を示している。

(3) 末期古墳の系譜と成立の契機

1) 土壙型の系譜

末期古墳の土壙型の出現について、林正之氏は初源期相当の時期で狭い周湟をもち乏しい遺物の末期古墳を土坑系Ⅰ群に分類して、『古墳文化』圏周縁部に遺存していた古式群集墳の遺制が、新式群集墳の隆盛に連動して、新たに展開した可能性を指摘する〔林正之 2015-p65〕。古式群集墳は5～6世紀前半の堅穴系埋葬施設をもつ古墳をさすが、この時期の古墳として、胆沢地域では奥州市沢田遺跡で4基の円墳周湟と11基の土壙墓が確認されている。円墳主体部は削平または調査区外になっており、検出されていない。土壙墓は長軸1.2m前後の長方形～楕円形を呈し、土壙側壁に川原石を平積みにおいており、その規模から伸展葬とは認められない。また八戸市田向冷水遺跡で1基の円墳と思われる円形周湟が検出されている。ただし、これらがそれぞれ約15km離れた岩崎古墳群や阿光坊古墳群へ1世紀ほど後に影響を及ぼしたかについては、主体部がいずれも確認されておらず比較できないこともあって、説得力が弱い。

上述のとおり、末期古墳の土壙型の平面形状には、長方形短辺部に斜めの張り出しをもつⅠ型とまたないⅡ型とがあった。前者は八戸地域の初源期の阿光坊やそれに続く丹後平古墳群に集中してみられ、他地域では散発的である。胆沢に隣接する和我地域の岩崎古墳群や北上盆地内の上田蝦夷森古墳群でも張り出しがなく、初源期において土壙型の地域差が明らかであり、土壙型の出自が異なることを意味している。

丹後平古墳群では側壁扶込土坑（地下式横穴）が12基確認されており、千葉県などに多く分布することから関連が考えられていることは前に述べた⁽⁴⁾。また林氏が7世紀中葉以後の土坑系Ⅱ群が常総中央部の堅穴系埋葬施設の片岩・砂岩・木製の棺材の影響を指摘したことと符合する。八戸地域の初源期の木槨は平板な横板が槨材として想定されることも調和的である。これらをまとめて考えると、この地域の末期古墳の系譜を常総地域に求めることも可能となってくる。いずれにしても短辺部の張り出しは横穴式石室を模したものであり、東国からの影響を強く受けていることは確かである。

ただし、八戸地域では石棺や礫槨を採用せず一貫して土壙型に固執している。それは前代の土壙墓のイメージが根底にあったためと考えられる。

一方、北上盆地の岩崎や上田蝦夷森古墳群では主体部が小判形や隅丸長方形となるものが多く、幅の狭い縦板が想定され、西島松5遺跡などの「続縄文」文化の土壙墓に通じる形態である。また岩崎古墳群では黒曜石の搔器や剥片が遺構内や周辺から400点出土し、前段階の黒曜石祭祀や黒曜石へのこだわりともいえるべき遺風を残している〔八木 2004-p16〕。このことから北上盆地の土壙型は、「続縄文」期の土壙墓を基礎に、地域の特定はできないが伸展葬や墳丘築造といった要素を取り入れて成立したと考えるのが妥当であろう。

2) 礫槨型の系譜

礫槨型の小口積み例として信濃松本平や南武蔵の多摩地区のほか仙台市安久東遺跡が挙げられている。松本建速氏は、松本市秋葉原古墳群の半地下式無袖式石室などは五条丸古墳群と規模や構造

が類似することから、「群集墳時代の積石塚や無袖横穴式古墳といった、古墳文化に属す系統の墓の派生形」ととらえた〔松本 2011-p115〕⁽⁵⁾。

高橋信雄氏や林正之氏が取り上げた多摩地区のあきる野市瀬戸岡 30 号墳などでは浅い堅穴を掘り、その底面から川原石を積み上げている。礫槨内部の長さは 3.5 m 以上で、半地下式無袖式横穴式石室の形態をとるのが一般的である。

また、これまで各氏が注目している仙台市安久東遺跡は、1・3 号墳は地山の上に積み土をしてその上に礫を積むもので、2・4 号墳が堅穴状掘込みをもつ。1 号墳は大半が削平され、5 号墳は両端の残りが良くないため奥壁もはっきりしないが、床の礫敷き部分が 3.4 m あることから無袖式横穴式石室で、報告に記述はないが半地下式と思われる〔田中 1995-pp272～279〕。5 号墳は鉄刀や馬具から 7 世紀前半、2～4 号墳は 7 世紀末～8 世紀前半と推定されている。

これらの古墳と東北北部との対比では、堅穴状掘込みを有する半地下式の a 型は礫槨内の長さが 2.5 m 前後で、横穴式石室ではなく堅穴式礫槨になる。 a 型や β 型、 β 型は無袖式横穴式石室を意識したもので共通点はあるが、半地下式とはならない。

β 型の側壁に立石をもつものは北上盆地で 8 世紀前半葉に出現するが、同時期資料として 7 世紀末から 8 世紀前半の長野県松本市安塚 6・8 号墳など、広く関東、中部地方にみられる。安塚 6 号墳は石室内が 8.1 m の全長をもち、規模が全く異なるが、8 世紀になっても新たな構築方法を採用していることから、東国との交渉は継続していたとみられる。

なお、堅穴住居の長礫横架型の竈が福島県南部あたりからの影響が考えられたが、古墳に関しては群集墳の中に半地下式川原石積みが見られるが、堅穴部分が大きく石室の裏込め部分が広いタイプが多く、北上盆地の礫槨型との差異が大きい。現在のところこの地域からの末期古墳への直接的な影響は確認できない。

礫槨型の類例は関東地方や東北中部に類例を求めることができるが、全く同じというわけではない。これらを古墳形態が伝播する過程での変形の枠内でとらえることが可能と思われるが、さらに広範囲の古墳との比較検討が必要であろう。

3) 末期古墳成立の契機

末期古墳が成立する前提として、東北北部の地域社会は遊動生活から定住生活に変化するときに、竈をもつ堅穴住居を受容し、同時に階層社会に移行した際に群集墳の墓制を受容した。

定住は安定的な食料獲得が可能になったこと、すなわち気候の温暖化にともない農耕が可能になったことによるものと考えられる

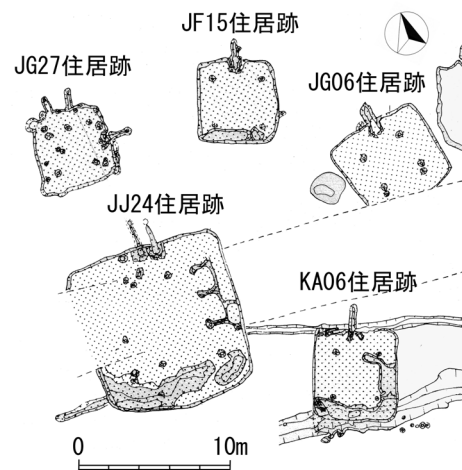


図 8 岩手県北上市猫谷地遺跡の単位集団を形成する堅穴住居群

[八木 2011-p233]。また階層は竪穴住居跡の規模からも裏付けられる。北上市猫谷地遺跡では面積は129㎡の大きな住居のまわりに25～38㎡の小さな住居が配置された7世紀前～中葉の竪穴住居跡5棟が検出されている。大きな住居には多くの土師器坏や甕類, 土製紡錘車, 大小の砥石が出土し, 周りに対する優位性が示されている。この5棟が合わさって単位集団＝「家」として機能し, 家長を中心とする階層社会を示すものとして注目されてきている[林謙作 1978-pp51～52]。

土壙型の成立にあたっては, 八戸地域では関東の常総地方などとの関わりが指摘され, 和我では古墳の要素を取り入れながら在地の土壙墓からの変形が想定された。また礫櫛型は竪穴状掘込みをもつ半地下式横穴式石室を模した川原石積みが南武蔵多摩地域や仙台平野に類例が確認されている。

集落については, 八戸地域では広く関東にみられる無～短煙道竈が導入され, 胆沢では長煙道竈に加えて竈焚口に長礫を横架する型がみられ, 陸奥南端の福島県南部あたりからの影響を受けたとみられる。

一方で土器をみると, 東北北部での関東系土師器は僅かで, ミガキ調整や黒色処理され在地化された類関東系土師器も出土遺跡数は多くはない。したがって多人数の移住や移民が積極的行われたとみることはできない。

限定的な人の動きの中で, 墓制に大きな変革をもたらしたのは, 短～中期滞在の東国や陸奥南端の人々が竪穴住居や墳墓形態をもちこんだと考えざるを得ない。彼らの動きの契機は, これまで指摘されているとおり馬匹生産や交易が大きかったと考えられる[高橋信雄 1996-p342, 八木 1996b-pp15～18, 松本 2006-pp17～28, 林正之 2015-pp75～77]。

東北北部における馬の飼育を示す資料として, 丹後平古墳群や房の沢古墳群の馬墓がある。それぞれ7世紀中葉や8世紀前葉からの古墳群で, 初源期にさかのぼるものではないが, 7世紀前葉の西根道場古墳群で轡が出土しており, 馬の飼育がさかのぼる可能性が高い。古代集落成立前には5世紀後半～6世紀前葉の奥州市中半入遺跡で馬の歯が検出されているが, その後集落の中断, 衰退があり, 馬とその飼育技術はあらためて東国からもたらされたものと考えられる。

馬の飼育技術とともに, 農業技術の伝授も行われたのであろう。特に胆沢は「水陸万頃」(『続日本紀』延暦8(789)年7月17日条)と言われ, 5世紀後半には角塚古墳が築造される経済的基盤を成した地域である。6世紀中葉には中断, 衰退するが, 6世紀末には温暖化により農耕が可能になり, 馬匹生産もさることながら, 稲作も含めた農業生産が主たる生産活動になったと考えられる。奥州市中半入遺跡の水田跡が広範囲に展開されるのは平安時代になってからであるが, 同じ低位段丘面に角塚古墳や集落が形成されていることから, 規模はともかく, 継続的な農業生産地であったと考えられる。これを裏付けるように低位段丘面には胆沢川をはさんで6世紀末には上餅田, 膳性遺跡で古代集落が開始されており, 稲作などの普及が想定される。

八戸地域は, 「ヤマセ」という寒気が入り, 品種改良されていない南方種の稲は育ちにくく, 代わって畑作や馬産の比重が高かったとみられる。

稲作などの農業や馬産, 馬匹交易が盛んになることは, 東国や陸奥南端の人々にとっても交易や生産物の収取など大きな利益につながったであろうし, 中には在地社会に入り, 地域のリーダー的存在になった者もいたと思われる。

いずれにしても産業の振興にともない、それらを采配する者が登場し、村長や家長が実権を握ることになる。大形住居に紡錘車や鉄器、祭祀に用いられたと推測される土玉などが集中する傾向にあり、生産用具の管理や家族祭祀が大形住居で行われていたことを示している。蝦夷社会が階層社会となったのは産業面での大きな発展があったからと考えられる。

②……………周湟墓からみる社会の変容

(1) 周湟墓をめぐる議論

周湟墓や円形周溝と呼ばれる環状の溝が注目されるようになったのは玉川英喜氏の論考が嚆矢である〔玉川 1990-pp11～20〕。氏は岩手県内の円形周溝遺構を集成し、末期古墳の主体部が削平されたものとした。円形周溝を末期古墳に位置づけたものとして評価されている。

筆者も末期古墳第4期に位置づけるとともに、周湟墓と円形周溝とを分けることを提唱した〔八木 2010-p105〕。周湟墓は出土品から主体部が残存しない末期古墳であること、小形で全周する円形周溝からは出土品がほとんどなく、墳墓とする根拠がないことから周湟墓とは別種の遺構ととらえられることがその理由である。集落遺跡などで単発的に検出されることが多く、時期も周湟墓が8世紀後葉以降であるのに対し、円形周溝は遺構の重複関係から8世紀前葉以前のものが確認され、時期が異なっている。

周湟墓は青森県でも類例が増え、小谷地肇氏が集成を行い、時期的変遷や地域ごとの偏りを指摘した〔小谷地 2016-pp123～129〕。青森県東部（八戸地域）で、9世紀に殿見遺跡など新規の墓域が出現すると同時に伝統的な末期古墳群が衰退し、10世紀に津軽で集落内墓域が形成され、中心が移ることを挙げている。さらに9世紀後半に円形土坑（火葬墓）を主体部とするものが出現するといった9世紀以降の展開を明らかにした。

岩手県内の集成は、高橋千晶氏が筆者の分類をもとに、土壙墓や蔵骨器などの他の墓制を加えて行っている〔高橋千晶 2017-pp228～233〕。

周湟墓の被葬者に関して、林氏は墓域の拡張や新設、分布域の拡大を伴う急激な変化は被葬者の階層の広がりを示すとしている〔林正之 2015-p78〕。筆者も盛岡市飯岡才川、沢田遺跡の分析をとおして家長層の墳墓だけでなく家族成員レベルの墓がかなり含まれており、家長層の卓出性が弱まると同時に、末期古墳を築造する権威が失われることを指摘した〔八木 2019-p56〕。

(2) 周湟墓の年代と分布

周湟墓は、本来末期古墳に含まれるもので、主体部が削平されたことによって遺構として環状の溝だけが残るものである。遺跡の残存状況も影響するが、ほとんど旧地表面もしくは墳丘中に主体部が置かれたために削平を受けやすかったことが、周湟墓の特徴である。墳丘中に築かれたものは墳丘造成後に堅穴として掘られたものであろう。

周湟出土の土器は、供献品として墳丘や周湟の陸橋部分に置かれた品々が周湟に落ち込んだものである。周湟墓の年代は周湟出土の遺物から判断され、築造年代とは時間差も考えられるが、各地

とも8世紀後葉～末には登場し、地域によっては10世紀頃まで存続する。

周湟墓は基本的に土壙型が削平されたものであるが、礫槨型の古墳群の例をみると、江釣子猫谷地・五条丸古墳群や西根縦街道古墳群でも周湟だけの例がいくつも検出されている。周湟からの供献品とみられる遺物はほとんどなく、時期も明らかではないが、土壙型の古墳群の周湟墓からの出土状態とは趣を異にしている。したがって礫槨型の古墳群における周湟のみのものは土壙型が削平されたものではなく、礫槨部分が失われたものと考えられる⁽⁶⁾。

周湟墓の分布する地域をみると、日本海側の秋田県や青森県西部（津軽）、北海道イシカリ地域（石狩低地帯の日本海側）では末期古墳1～3期のものはみられず、4期に周湟墓として成立している。主体部が残る例があるが、周湟墓と同じ8世紀末～9世紀のものである。

数十基を擁する周湟墓群は、青森県八戸市の丹後平（1）と殿見遺跡、岩手県二戸市諏訪前遺跡、一戸町御所野遺跡、盛岡市飯岡才川・飯岡沢田遺跡、秋田県横手市雄物川蝦夷塚古墳群、羽後町柏

表1 周湟墓の年代

県	市町村	8世紀後葉～末	9世紀前半	9世紀後半～10世紀
青森県(東部)	おいらせ町		阿光坊 J21・23号墳	阿光坊 J10号墳（長頸瓶）
	八戸市	丹後平(1)15号	丹後平(1)1・2・3・6・8・12・13号	
	八戸市	殿見1号	殿見9・23号	
青森県(西部)		—	原3号墳	野尻(2)101号・(3)5号
秋田県	横手市	蝦夷塚2号周湟		蝦夷塚1号
	五城目町	岩野山 B12号周湟		
	羽後町			柏原2・64号（長頸瓶）
岩手県	二戸市	諏訪前 SX30(蔵手刀)		諏訪前 SX16
	一戸町	御所野 11・12・22号墳	御所野 1・2号墳	御所野 6号墳（須恵器坏3点）
	盛岡市	飯岡才川 RZ022・023・032	飯岡沢田 RZ015・026・034・037・038	
	遠野市ほか	高瀬 I 4号周湟	大釜館 2～4・7・9	湯沢 B no1・3・4・7・9

表2 末期古墳と周湟墓の道県別確認数

道県	地域	末期古墳		周湟墓		計		摘要
		遺跡数	基数	遺跡数	基数	遺跡数	基数	
北海道	イシカリ	3	4	2	20	3	24	末期古墳は8世紀末以降
	シコツ	3	11	3	13	6	24	
青森県	津軽平野	0	0	25	116	25	116	
	三八上北	2	59	32	160	34	219	
秋田県	米代川沿	0	0	3	9	3	9	末期古墳は9世紀
	秋田平野	1	6	2	2	2	8	
	横手盆地	2	3	2	57	2	60	
岩手県	馬淵川沿	3	5	9	97	12	102	末期古墳は9世紀
	三陸沿岸	2	51	1	9	3	60	
	北上盆地	11	195	19	226	30	421	
計		27	334	98	709	120	1,043	

- ・周湟墓は末期古墳に含まれるが、表では外数を示した
- ・北海道イシカリは札幌市と江別市、シコツは恵庭市と千歳市の遺跡
- ・地域別の計は同一遺跡で末期古墳と周湟墓がある場合は1遺跡として集計
- ・青森県は小谷地肇 2016「末期古墳の展開と終焉」『日本考古学協会弘前大会資料』による
- ・秋田県は高橋和成 2019「末期古墳の被葬者からみた古代北奥社会」『考古研究会 2019 年度研究大会資料集』などから集計
- ・岩手県は高橋千晶 2018「岩手県における古代墓制の展開」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』による

原古墳群と、遺跡数は限られる。これまで各地に営まれてきた大規模な古墳群の数に比べると減少している。

丹後平(1)遺跡は、7世紀中葉以来の丹後平古墳群の北に隣接して、8世紀後葉に新たに墓域となったところで、9世紀後半まで続く。殿見遺跡は丹後平の西約2.5 kmと近接し、時期もほぼ重なっている。丹後平(1)遺跡は規模の異なる周湊墓が混在するが、殿見遺跡は内径7～9 mの範囲ではほぼそろっている。規模が被葬者層の階層などを表すとするなら、両遺跡で異なっていることは興味深い。

二戸市諏訪前遺跡で37基、一戸町御所野遺跡で24基が確認され、ともに8世紀後葉から9世紀にかけての時期である。周辺には古代集落が存在するが、自然地形で区切られるなど、集落とはやや離れている。諏訪前遺跡の北約5 kmにある8世紀中～後葉頃とみられる堀野古墳があり、御所野遺跡ではそれ以前の末期古墳が近くにみられない。いずれにしても新規に成立した墓域である。

飯岡才川遺跡35基と飯岡沢田遺跡50基は小さな沢を隔てて隣接する。才川は8世紀後葉に、沢田はやや遅れて9世紀前葉に開始され、9世紀中葉までともに存続し、沢田が全体的に新しい段階のものが多。外径7.5 m、内部面積30 m²を境に大形墳と小形墳にわかれる。大形墳には須恵器大甕や長頸瓶などを供献する割合が高くなり、家長層が被葬されたと考えられる。才川では大形墳の規模が比較的まとまっており規格的であるが、沢田は規模の幅が大きくなり全体的に小形化している。全周湊墓のうち小形墳は沢田で2/3を占め、才川の倍の割合となっており、小形化が顕著に進んでいる。

蝦夷塚遺跡は18基、そこから南約8 kmの柏原古墳群は64基が確認されている。時期を示す遺物とはともに欠けるが、蝦夷塚では8世紀代の土師器が出土しており、またかつて玉類が出土していることから、蝦夷塚が先行するようである。規模は蝦夷塚が均一的、柏原は規模のばらつきが認め

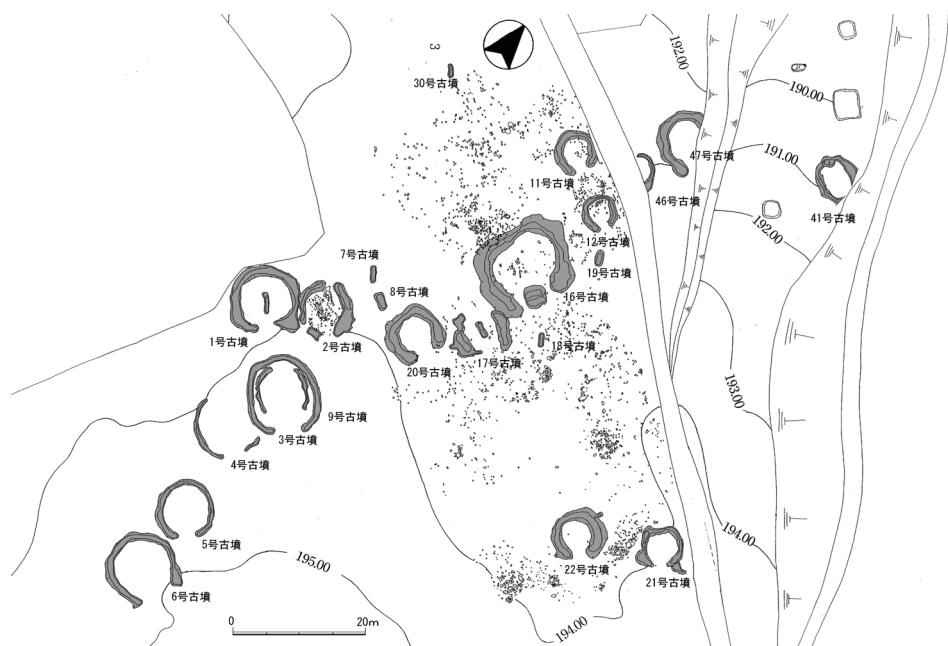


図9 岩手県一戸町御所野遺跡の周湊墓群

られる。

各地で近接して営まれる周湟墓群は開始時期や全体の存続が古いものほど、規模の大小差の幅が小さく、新しいものは大きくなる傾向がある。これらから家長層の権威の低下と、小形墳も含めて被葬者層が家族成員まで次第に広がる流れを読み取ることができる。

さらに、中規模程度の10基前後やそれ以下の古墳群も各地で見られる。青森市野尻(2)、野尻(3)、新町野遺跡では14～22基の周湟墓が確認されているが、集落の居住区に隣接した箇所に集中している。盛岡市湯沢B遺跡では12基の周湟墓が確認され、南北に隣接する湯沢A遺跡と稲荷遺跡で住居跡が検出されている。3遺跡は近接し1集落ととらえることができ(現在『盛岡市遺跡地図』では下湯沢遺跡として1遺跡として扱っている)、集落の一面に周湟墓が配置された形である。このほか数基の周湟墓が確認されている遺跡でも集落の一面に置かれる場合が多い。

このように、周湟墓はこれまで末期古墳群とは一線を画す形で新たに墓域が形成されている。比較的大きな周湟墓群の数は減少し、中規模～数基程度の周湟墓群は集落の一面に営まれるようになる。これは8世紀中葉までの従来の「村落」[八木 2019-p61]が墓域形成をいったん中断し、新たな墓域として、①村落ごとの墓域、②集落ごとの墓域、③家族単位の墓域を設ける場合とに分化したことになる。

村落ごとの墓域が全体的に減少することは、多くのところで村落での墓域共有の理念が失われ、集落ごと、家族ごとで墓域を形成するようになったことを示している。地域社会の中で村落や集落のあり方が大きく変化し始めたのである。

(3) 周湟墓成立の要因

8世紀後葉の太平洋側の末期古墳の変化、周湟墓成立の背景には住居数の著しい減少がある。北上盆地北部から八戸地域にかけての地域では6世紀末～7世紀前葉に開始された古代集落が、7世紀後葉にいったん増加のピークを迎えた後、8世紀後半に最小となり、その後再び増加している。7世紀後葉と8世紀後半を比較すると青森県上北から八戸、岩手県北で5%以下に減少、北上盆地北部の岩手斯波や三陸沿岸で10%程度、盆地中部の和我稗縫で2割強となっている。盆地南部の胆沢磐井では76%と減少幅が小さい。

表3 青森県東部～岩手県の時期別住居数

	7世紀 前葉	7世紀 中葉	7世紀 後葉 a	8世紀 前半	8世紀 後半 b	9世紀 前葉	9世紀 中葉	9世紀 後葉	10世紀 前葉	10世紀 中葉	10世紀 後葉	計	b/a
青森上北	0	1	9.5	14.5	0	1	14	131	228.5	141.5	0	541	0.0%
青森八戸	17	43	282	136	13	33	348.5	310	117	278	6.5	1584	4.6%
岩手県北	7	31	138	66	4.5	21.5	22	66.5	254	61	96.5	768	3.3%
三陸沿岸	3	11	57	32	6	12.5	24	57	143	75	50.5	471	10.5%
岩手斯波	11.5	34.5	297	212	32	57	89.5	423.5	433.5	170.5	21	1782	10.8%
和我稗縫	7.5	5.5	35	21.5	8	44.5	54.5	263	191	5.5	0	636	22.9%
胆沢磐井	23	43	73	76	55.5	117.5	106.5	238.5	193	20	6	952	76.0%
計	69	169	891.5	558	119	287	659	1489.5	1560	751.5	180.5	6734	13.3%

・青森県の住居数は宇部則保「古代都母の地域様相」『北奥羽の古代社会』表1から引用、集計
・岩手県の住居数は筆者の集計

表 4 青森県西部～秋田県の時期別住居数

	7世紀 前半	7世紀 後半	8世紀 前半	8世紀 後半	9世紀 前葉	9世紀 中葉	9世紀 後葉	10世紀 前葉	10世紀 中葉	10世紀 後葉	計
津軽	0	1	7	38	33	42	136	2177	700	927	4061
米代川流域	0	2	1	6	0	8	17	666	330	419	1449
秋田平野	0	1	7	19	17	9	16	53	6	5	133
横手盆地	0	25	9	20	14	4	10	40	2	10	134
計	0	29	24	83	64	63	179	2936	1038	1361	5777

・住居数は齋藤淳「集落・堅穴建物動態から見た北奥古代史」『北奥羽の古代社会』第18図から引用、集計

この時期の住居数の減少はある程度人口の減少ととらえることができ、村落や集落さらには家長層にまで大きく影響を及ぼした人口減少であった。それまでの村落を中心とした末期古墳の築造を維持することができなくなり、北上盆地の礫槨型もこの段階で終焉を迎えることとなる。新規の大規模墓域の形成は、村長の交代や村落内の構造変化によるものであろう。また村落が墓制と切り離されて集落ごとに中規模の墓域や家族ごとの数基程度の周塋墓を営むようになる。このように、村落のあり方が大きく変化したものと考えられる。

日本海側ではこの時期に末期古墳が周塋墓という形で登場する。太平洋側と比べると日本海側の8世紀までの集落はかなり少ない。堅穴住居による集落が登場するのが7世紀後半になってからで、その棟数もまだ少ない。8世紀後半から津軽や秋田平野、横手盆地などで増え始めるが、極端な増加には至っていない。⁽⁷⁾

阿倍比羅夫の北征は、斉明天皇4(658)年から3年間行われ、靺鞨の蝦夷恩荷に位階を授け、淳代・津軽二郡の郡領を定めたと記録される(『日本書紀』斉明天皇4(658)年4月条)。その後二郡の大領、少領に位階を授けている(同7月4日条)。この記録によれば、すでに7世紀中葉に蝦夷郡の郡領となり得る階層が存在したことになるが、考古資料はそれに対応していない。

いずれにしても、8世紀前半まで人口は少なく、末期古墳を築造する階層が顕在化していなかった。8世紀後半から住居数が増え始め、周塋墓が造られるようになる。太平洋側では被葬者層の拡大が始まっており、そのことも周塋墓の普及に影響していたと思われる。

秋田平野では秋田城(築城当初は出羽柵)が天平5(733)年に、横手盆地では雄勝城が天平宝字2(758)年に造営されている。また天平宝字元年から7年まで小勝村や雄勝城に柵戸移配や流人が移されている。周塋墓が形成されるのはこの後であり、外部からの進出にともなって、在地住民の社会は階層社会へと転換していったのであろう。

③……………栗原等五地域の“末期古墳”の検討

岩手県最南端から宮城県北部では8世紀前後の横穴墓と群集墳が混在して分布している。このうち群集墳は北上盆地の末期古墳と同じように蝦夷系の墳墓としてとらえられ、筆者もこれまでそのように扱ってきた[八木 1996a-pp67～75]。

しかし北上盆地の末期古墳の礫槨型が6世紀末から7世紀にかけて登場し、8世紀中葉前後で衰退する。それに対し、宮城県北部では時期が判明するものは8世紀後葉～9世紀になってはじめて

出現する。また川原石小口積みを基本とする礫部型とも積み方が異なっていることから、当該地域の群集墳について再検討することとしたい。

(1) 栗原等五地域の群集墳の位置づけ

群集墳が発掘調査で確認されている例として、岩手県一関市と宮城県登米市とにまたがる杉山・蝦夷塚、栗原市鳥矢ヶ崎、石巻市和泉沢がある。このほかにも栗原市城内、桃生町山田圃、同合戦谷、北上町月浜、気仙沼市三島古墳群などが知られている。古代の磐井・登米・栗原・気仙・桃生の5地域に分布している⁽⁸⁾。

末期古墳の命名者である石附喜三男氏は、杉山古墳群を末期古墳に位置づけている。ただし詳細な記述はみられず、8世紀前後の古墳ということで末期古墳に含めたとみられる〔石附 1965-p23〕。

和泉沢古墳群を調査した佐々木茂禎氏はその報告の中で、色麻古墳群などの横穴式石室との比較で玄室と羨道が不明確で規模が小さく、奥壁石も小さな石を使い、形式的な模倣であるとした。江釣子古墳群などの末期古墳と一括できそうであるが、周溝がなく、川原石の小口積みではなく割石を用いているなどの違いも指摘している〔河北地区教育委員会 1972-pp10～15〕。

また鳥矢ヶ崎古墳群の調査から加藤孝氏は、1号墳が岩手の「蝦夷塚」（末期古墳）に、2号墳が宮城県中南部以南の後期高塚古墳の構造に類するとしている〔栗駒町教育委員会 1972-p32〕。

高橋信雄氏は末期古墳を分類した中で、和泉沢古墳群をI型に位置づけ、末期古墳の中に含めているが〔高橋信雄 1987-p13〕、後に、周溝がなく封土が明瞭でないことから積石塚の系統と考えている〔高橋信雄 1995-p59〕。筆者は、鳥矢ヶ崎、杉山・蝦夷塚、和泉沢古墳群を末期古墳の分類に組み込んだ〔八木 1996a-pp67～75〕。高橋氏も筆者も北上盆地との差異を認識しながらも、それま

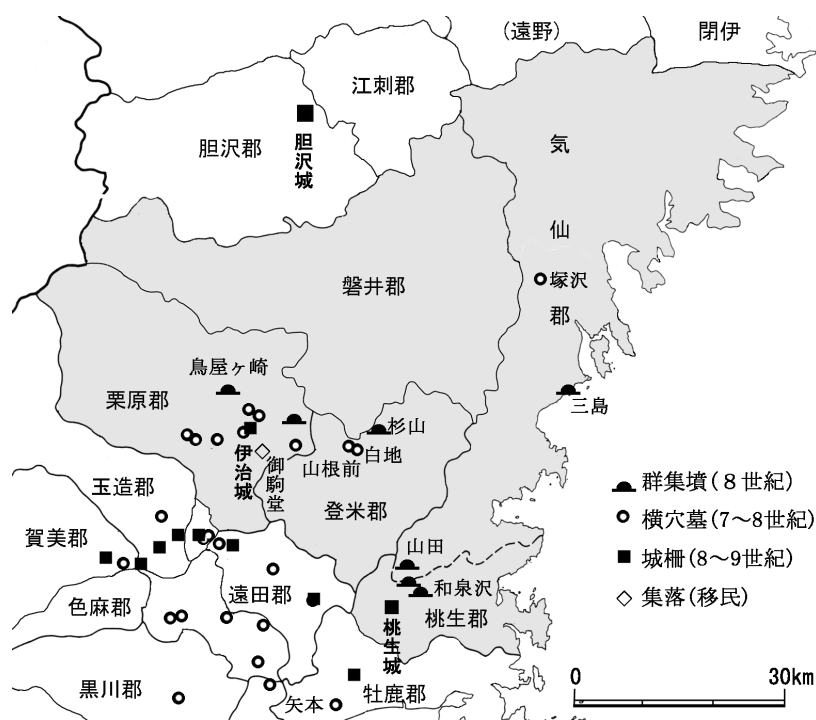


図10 宮城県北部の群集墳と横穴墓の分布

で通りの末期古墳に含める考え方を前提に分類したもので、末期古墳の範疇についての考察は行っていない。

辻秀人氏は、鳥矢ヶ崎古墳群の再調査を行い、2号墳出土の銚帯を根拠に律令国家と関係が深い一族の古墳群としながらも、1・2号墳とも北方の末期古墳と同じ系譜の埋葬施設とした〔辻 2016-pp67～68〕。そして横穴墓と末期古墳が混在し、関東からの人々と伊治公一族と複雑な様相を呈していたとしている。

このように、これまでの研究史を概観すると、宮城県北部の群集墳を末期古墳に位置づけることではほぼ一致している。

(2) 栗原等五地域の群集墳の構造

あらためてこの地域の群集墳の構造を確認しておきたい。まず磐井郡南端と登米郡北端の境に位置する杉山・蝦夷塚古墳群⁽⁹⁾は、割石を積み上げて石室を設け、墳丘を造った積石塚で30基以上の墳丘があったとされる。

5号墳は、短辺側の両壁に高さ0.3mの平石を立て、側壁を細長の割石を小口積みにして0.8m×0.4mの長方形の石室空間を造りだしている。そのまわりに3.5m×2.4mの範囲に大きめの割石を積んで積石塚としている。石室の端部から底部糸切りの須恵器小形壺が出土している。4号墳も、両短辺に高さ0.4mの平石を立て、側壁を小口積みで1.7m×0.4mの空間の石室を形づくっている。短辺側にも大きめの割石を置いている。出土遺物はみられない。

両墳は、両端に平石を立てる竪穴式石室である点や割石を用いる点で共通する。石室規模や石室の周りの割石の配置では異なり、5号墳はその規模から火葬骨埋納が想定される。

栗原郡の鳥矢ヶ崎古墳群は2基の古墳が調査されている。1号墳は径6.3m、高さ0.7mの円墳で、周塹をもつ。主体部は盗掘されており、石室は川原石で造るが小口積みにはなっておらず、内部は1.0m×1.3mの楕円形を呈し、火葬骨の埋納とみられる。羨道状の浅い掘込みも認められている。

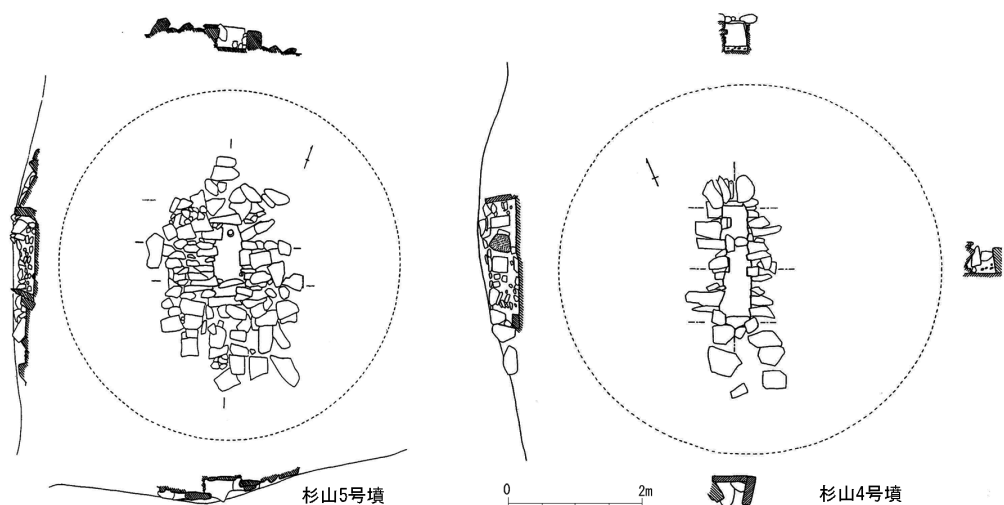


図 11 岩手県一関市花泉町杉山古墳群 5号墳（左）と 4号墳（右）

出土遺物は非轆轤で平底の土師器坏，非轆轤の小形甕，須恵器甕で，9世紀初頭前後の年代である。

2号墳は径約6.5m，高さ1.1mの円墳で，周湟底面には白色粘土を貼り付けている。墳丘中央に2.8m×0.7mの木棺が直葬され，人骨が遺存していた。棺内から銅製銚帯金具，棺外から蕨手刀が出土し，ほかに土師器甕，須恵器高台付坏も出土している。銚帯は8世紀，土器は8世紀後半

代〔安達2015〕，蕨手刀は鞘金具の横鐙から8世紀末～9世紀に位置づけられる。

気仙郡の三島古墳は7基の群集墳で，大谷海岸の海岸段丘上に立地し，現在4基の墳丘が確認される。うち昭和4年建碑の「蝦夷塚」碑のある古墳には割石が墳丘全面に確認されることから割石の積石塚であると確認される。勾玉・切子玉・管玉・⁽¹⁰⁾ガラス小玉が出土している。



写真1 宮城県気仙沼市三島古墳群の現況

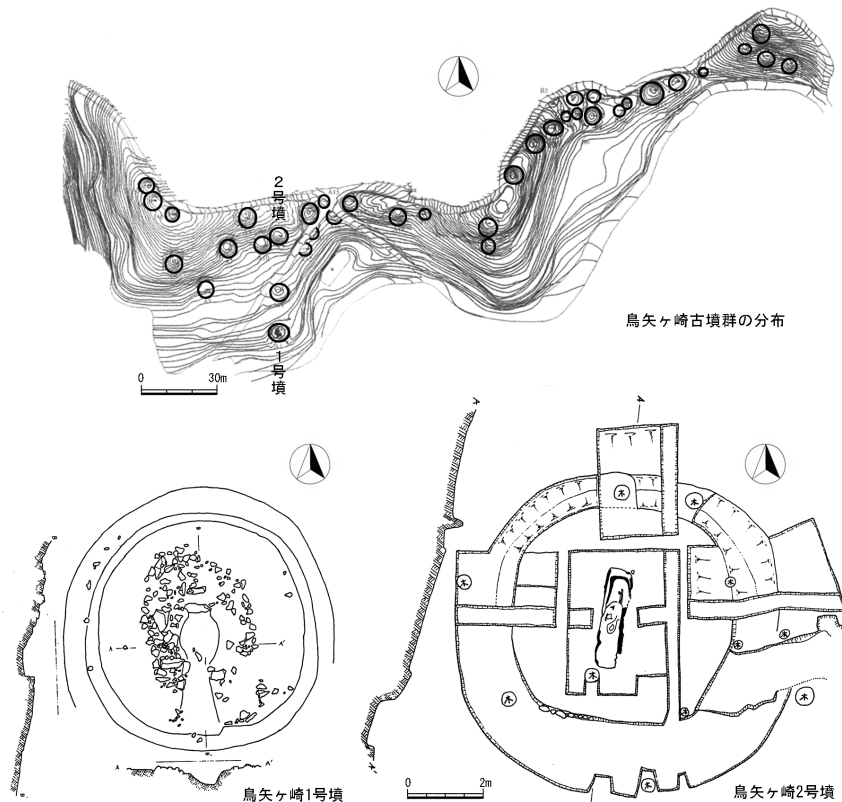


図12 宮城県栗原市栗駒町鳥矢ヶ崎古墳群（左：1号墳 右：2号墳）

〔安達訓仁2015「鳥矢ヶ崎古墳群A1・A2号墳出土遺物について」『歴史と文化』第53号に加筆〕
〔栗駒町教育委員会1972『鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報』〕

桃生郡では、山田古墳出土の蕨手刀・方頭大刀・銚帯金具・勾玉が報告されている〔小井川 1991-pp.48～49〕。古墳の数や主体部構造などは、畑地開墾時の出土のため不明となっている。蕨手刀の年代は8世紀中～後葉、方頭大刀は銅製覆輪を柄頭にはめ込んだもの、銚帯金具は銅製で横長の巡方、勾玉は瑪瑙製のコの字形を呈する。いずれも8世紀代に位置づけられる。

合戦谷古墳群は、現地の標柱に「墳丘断面を半円形状に割石を積み上げた積石塚で、平安時代（9世紀頃）と考証されている。」と表記されている。時期の根拠は不明であるが、合戦谷古墳群出土とみられる蕨手刀は8世紀前葉に位置づけられる。

和泉沢古墳群は50基が確認されており、粘板岩の割石を積み上げた積石塚である。3基が調査されており、10、15号墳は竪穴式石室で、3.7m×0.94m、2.6m×0.6mの内部空間を割石小口積みで造りだしている。奥壁に平石を立て、側壁にも仕切りの立石を立てている。床石は敷かれていないが、玄門部に当たる手前側には割石を置いており、横穴式石室を意識した構造となっている。

6号墳は主体部が盗掘されて原形を保っていないが、1.9m×0.9mの楕円形が確認されている。側壁の立石がないことや長さが短いことから15号墳のような長方形石室とは考えにくく、杉山3

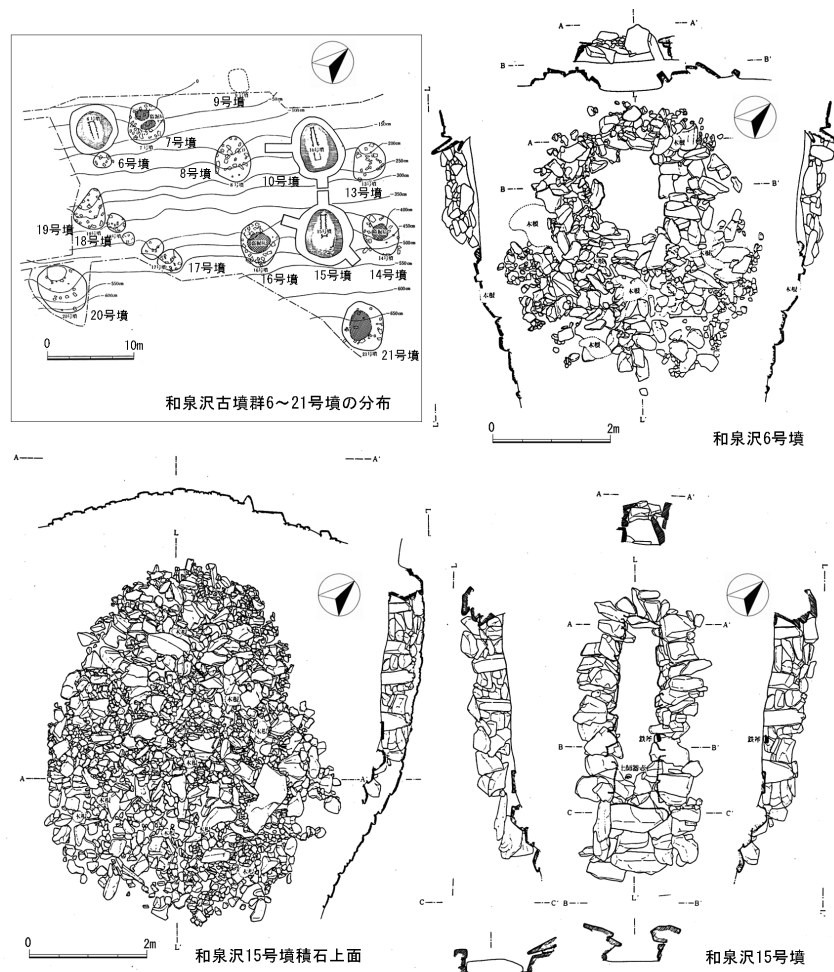


図 13 宮城県石巻市河北町泉沢古墳群
〔河北地区教育委員会 1972『泉沢古墳群』〕

号墳や鳥矢ヶ崎1号墳のような火葬墓と推定される。6・10・15号墳から底部糸切りの須恵器坏が出土していることから9世紀以降である。

これらの古墳群ではかつて出土した蕨手刀が残されている。蕨手刀は、柄頭の形状・柄反り・絞り、足金具で時期の検討が可能である〔八木 1996c-p384～387, 黒済 2018-pp102～106〕。この地域では7世紀にさかのぼる蕨手刀はみられず、合戦谷古墳群出土とみられる例が8世紀前葉、山田囲古墳は8世紀中～後葉、鳥矢ヶ崎1号墳は8世紀末～9世紀となり、8世紀中～後葉が多い。和泉沢古墳群の蕨手刀は原形を留めていないとみられ、はっきりした年代は不明である。

ちなみに、横穴墓出土の蕨手刀は、栗原市築館大沢、小館山横穴墓、登米市石越山根前横穴墓2・4号墳が8世紀前葉となっており、栗原市姉歯、西沢横穴墓が8世紀中～後葉と、全体的に群集墳が後出の傾向を示している。

(3) 栗原等五地域と北上盆地の古墳の違い

栗原等の群集墳は、北上盆地の礫槨型と対比されて末期古墳に位置づけられている。しかし両地域の古墳には石室構造と時期において相違点が認められる。

まず立地であるが、鳥矢ヶ崎古墳群や和泉沢古墳群など、低丘陵部や緩斜面などに立地している。集落遺跡が近隣では確認されていないが、少なくとも集落の立地とは異なる占地が行われている。それに対して、北上盆地では河岸段丘など集落の立地と同じ平野部にほとんどが存在している。江釣子古墳群では古墳と住居が隣接して検出される場合もある。集落と墓域との距離や景観などに対する意識が異なっていたと考えられる。

次に、石室構造は、杉山・和泉沢・三島・合戦谷古墳群では割石による積石塚となっている。北上盆地の江釣子・熊堂古墳群では石室の周囲も川原石を積んでいるが、割石の例はみられない。割石は福島県などの群集墳に用いられることが多い。杉山4号墳と和泉沢15号墳が類似の細長い石室をもつ割石の小口積みとなっているが、杉山5号墳、和泉沢6号墳、鳥矢ヶ崎1号墳はそろった小口積みとはなっていない。

北上盆地では川原石を小口積みにして細長い石室を設けている。また奥壁に平石を立て、側壁に仕切り石を立てる和泉沢15号墳の例は北上盆地にもみられるが、杉山4・5号墳のように両端に平石を立てて竪穴式石室にする例は、半地下式竪穴式礫槨を除き、北上盆地にはない。

杉山5号墳・和泉沢6号墳・鳥矢ヶ崎1号墳にある火葬骨埋納とみられる石室規模のものは、新しい時期の変化ととらえられるが、やはり北上盆地の礫槨型にはみられない。

さらに、大きな相違点は時期が異なることである。北上盆地では7世紀に川原石を小口積みにする礫槨型が登場し、8世紀に礫積みの高さがやや高くなり、擬似的な横穴式石室の形状を明確化させる。終末は蕨手刀や土器などから8世紀末までは下らず、8世紀中葉のあたりで終焉を迎える。それに対して、栗原等では出土土器が9世紀代のものがほとんどである。蕨手刀の年代から8世紀前葉にさかのぼる可能性もあるものの、主体は8世紀後葉～9世紀が主体と考えられる。

末期古墳は蝦夷系の墳墓として、古墳文化の古墳とは異なるものと認識されてきた。栗原等の群集墳が、北上盆地の末期古墳と同じように、蝦夷系の墳墓であるとするなら、7世紀からの伝統的な墓制をもつ北上盆地で衰退してから新たに栗原等の蝦夷が築造を始めたことになる。それまで末

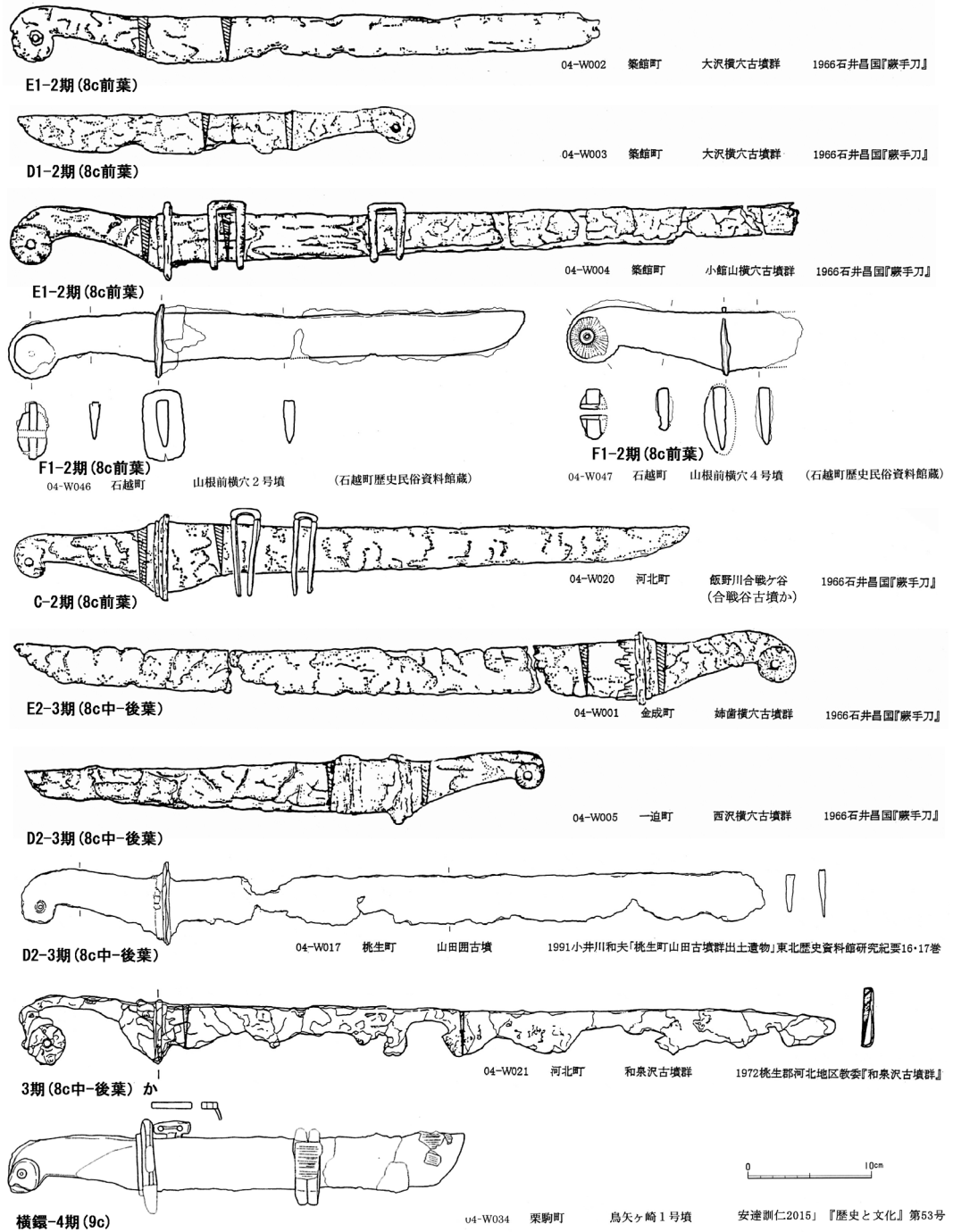


図 14 栗原等五地域出土の藏手刀
〔分類と時期は 八木 1996c による〕

期古墳を築造しなかった地域で北上盆地の墓制を取り入れるとすると、北上盆地の蝦夷の移住などが考えられるが、上述のように石室構造などに大きな相違点がある。

このように、栗原等の群集墳を蝦夷系の末期古墳とするこれまでの説は再考される必要がある。

(4) 横穴墓と群集墳との時間差

栗原等の地域には横穴墓が築造されている。それらはほとんどが8世紀と考えられている。現在確認されている横穴墓群は栗原10、登米2、気仙1、桃生と磐井は0となっている。ほとんどが栗原と隣接する登米北西部に集中する。出土遺物には覆輪方頭大刀の柄頭と靱尻金具、刀子、鉄鏃、玉類、鈐帯金具などがあり、ほぼ8世紀代におさまる。

登米市^{はくじ}白地横穴墓5基のうち1号墳は玄室平面が方形、奥壁と手前左右に3棺座をコの字形に配し、天井部は横断面が丸く縦断面が直線的なアーチ状を呈する肥後系横穴墓である。他の4基は玄室平面が奥壁側隅丸方形で床が玄門側に傾斜し、棺座等の施設をもたないもので、玄門は玄室より一段低くなり、平面でくびれる形となる。

同市山根前横穴墓は10基が調査されている。玄室が方形、長方形、楕円形の3形状、左右天井部が丸いアーチ型と縦・横断面が丸くなるドーム型とがあり、側壁中央または床中央に溝を掘る。遺物は、2号墳前庭部の土師器坏が8世紀中～後葉、7号墳の鉄刀は丸鞘単鐔単脚を備え、7世紀に位置づけられるが、他の古墳出土の土器は8世紀前葉を中心とする時期である。

栗原の横穴墓は、発掘調査が行われておらず、実態は不明であるが、蕨手刀が出土している横穴墓が複数あり、多くが8世紀代のものとみられる。

気仙の横穴墓は気仙沼市塚沢横穴墓で、日本最北の横穴墓となっている。^{やっせ}八瀬川左岸に7基、右岸に3基が分布し、横穴形状は不整形である。左岸の横穴墓から18歳前後の男性人骨や須恵器、土師器、刀装具などの副葬品があり、8世紀末～9世紀初頭の時期を示している。右岸の横穴墓では副葬品は出土していない。

古川一明氏によると、この地域の横穴墓の特徴は、①横穴墓の規模が小さい、②長い羨道部を有しない、③関東以西と直接の関係が確認できない、④最盛期は7世紀末～8世紀前半代、⑤江合川流域以南から二次的に受容したとされる〔古川 1996-pp269～270〕。

栗原、登米地域の南の江合川や鳴瀬川流域の大崎平野〔石巻平野を含む〕では26の横穴墓群、仙台平野では30以上の横穴墓群が知られている。その中で内部構造がわかるものでは8横穴墓群で肥後系のコの字形屍床が確認されているが、それぞれの群の横穴墓すべて肥後系となっておらず、多くとも半数以下で、主体を占めているわけではない〔岩橋 2014-pp37～56〕。このほか北九州の影響を受けたものや出雲系などのさまざまな地域の影響を受け、複雑な様相を呈している〔百々 2010, pp.69-83〕。

東松島市矢本横穴墓群では7世紀中葉から9世紀前葉まで機能し、牡鹿の道嶋氏を含む赤井遺跡（牡鹿郡家・柵）の人々の墓域と考えられている〔佐藤 2019-p125〕。築造時期は、栗原、登米地域は蕨手刀からみると8世紀前葉で、高塚の群集墳より古い年代を示している。大崎平野では7世紀前半～8世紀前葉とされ、9世紀まで追葬などが行われたとする〔高橋誠・大谷 2008-pp.107～114〕。大崎平野での開始が1世紀ほど先行していることになる。

また7～8世紀において猿投産と湖西産須恵器の面的な分布は大崎～仙台平野までであり〔佐藤・大久保 2007-pp111～133・佐藤 2010-pp105～128〕、関東系土師器も栗原最南端の泉谷館遺跡を除く

と御駒堂遺跡周辺にあるのみで、ほとんどが大崎平野以南である。このように大崎平野と栗原等5地域とは大きな地域差と時間差がある。

横穴墓の時期に対応する集落遺跡が栗原市御駒堂遺跡である。7世紀末～8世紀初頭に北武蔵の関東系土師器が入り、8世紀前葉に短煙道・白色粘土を使った張出竈などの竪穴住居（22棟検出）が営まれる。ほとんどが北武蔵に加えて南武蔵の関東系土師器で占められ〔佐藤 2007-pp183～188〕、住居形態や甕も含めた土器組成から関東からの移民が考えられている。村田晃一氏は、①類集落一竈と土師器が在り地型で構成される集落、②類集落一関東型竈と関東系土師器が主体となる集落、③類集落一掘立柱建物と竪穴住居が計画的に配置され、関東系土師器が出土する集落に分け、御駒堂遺跡周辺で8世紀前葉に②・③類集落が激増することからまとまった移住が行われたとしている〔村田 2016-p152〕。

しかし横穴墓は移民の人々が直接もたらした墳墓形態ということでもなさそうである。古川氏の指摘にもあるように、関東からの直接的な関係が認められないことから、大崎、仙台平野からの人々の流れや在地住民が横穴墓の被葬者と考えられる。

（5）群集墳築造の背景

8世紀後半には関東系土師器がみられなくなり、遺構面でも関東系の要素を抽出することは難しくなるが、文献では、天平宝字2（758）年の桃生城造営の際には陸奥国浮浪人や坂東の騎兵・鎮兵・役夫らが徴発されている。神護景雲元（758）年に伊治城造営の翌年には浮浪百姓2,500余人を伊治村に、延暦15（796）年に相摸・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後等の国の民9,000人を柵戸として伊治城に集中的に移配していることが記録されており、多くの人々が桃生郡や栗原等に入り込んでいた。

また8世紀後葉から9世紀初頭にかけて、三十八年戦争と呼ばれる宝亀5（774）年から弘仁2（811）年まで緊張関係の時期が続いている。鳥矢ヶ崎古墳群や和泉沢古墳群が開始されるのがこの頃である。城柵造営や出兵にともない多くの兵士が関東などから徴発され、栗原や桃生郡に多数の外来者がやってきた。

一方で、在地勢力の台頭や登用もあった。宝亀11（780）年に伊治城を攻撃した伊治公弋麻呂は「上治郡」の大領に任じられているが、弋麻呂は蝦夷出身との理由で牡鹿郡大領道嶋大楯と不和であったことが記録されている（『続日本紀』宝亀11（780）年3月22日条）。在地住民の中には弋麻呂のように郡司などの役職に就き、社会的地位や身分の象徴として群集墳の葬制を取り入れたのであろう。すでに大崎平野以南では群集墳の築造はほぼ終了しており、被葬者は外来者ではなく在地出身者と考えられる。

栗原等5地域の戦争状態は宝亀年間ではほぼ終了したとみられるが、柵戸移民はその後も続けられており、群集墳はその後にも築造されている。在地の人々は群集墳を自らの墓制の中に位置づけ、維持継承していったのである。

おわりに

以上のように、いわゆる末期古墳をとおして北部蝦夷社会の成立と変容をみてきた。6世紀末～7世紀前葉にかけて、在地社会が堅穴住居による定住生活と末期古墳を築造する階層社会が成立する。その過程において、八戸地域と胆沢地域でそれぞれ異なる東国の影響を受けていたことが明らかになった。八戸地域は古墳時代にも太平洋岸ルートを通じて移民集落が形成されたが、蝦夷社会成立時においてもこのルートが大きな役割を果たしたと考えられる。胆沢地域は陸奥南端（福島県南部）を通る内陸ルートが想定される。ただし大人数の移住や移民は認められず、在地住民が主体であった。

今後の課題として、「続縄文」期の土壙墓の検出例が少なく末期古墳との比較検討が十分に行えない状況にあり、資料の増加を待つこととしたい。また影響を及ぼした地域の特定はより広範囲に類例を参照していくことが求められる。

8世紀後葉になると、末期古墳は大きく変容する。大幅な人口減少にともない従来の村落のあり方にも変化が起き、共有の墓域が減り、集落ごとの墓域形成や被葬者層の拡大が起きる。その時期は北部蝦夷社会に城柵が造営される前後でもあり、城柵造営を含めた社会の変容を明らかにすることが課題である。

宮城県北部～岩手県南端の群集墳については、末期古墳の構造とは異なるもので、在地住民の台頭にもなって取り入れられた墓制である。今後、大崎、仙台平野あるいはさらに南の地域の群集墳との対比を行い、この地域の群集墳の系譜を明らかにする必要があると考えている。

註

(1)——星川吉寛の記録は、寛政9(1797)年に北上市江釣子古墳群の礫櫛と出土品の図とともに出土状態などが記載されている(原本は岩手県立博物館蔵)。

(2)——柵囲集落は、7世紀の宮城県において柵によって囲繞された集落で、これまで囲郭集落と呼ばれてきたものである[村田2002-p66]。

(3)——長礫横架型の竈は、8世紀以降岩手県北上市中村遺跡や宮城県栗原市御駒堂遺跡などでも類例がみられるが、胆沢地域の初源期の古代集落より後出である。

(4)——側壁扶込土坑は長軸2m前後の長方形プランで、底部長編側の片側に扶込みを有する形状が一般的である。丹後平古墳群では同形状の土坑も存在するが、不整な平面形で、長軸側ではない扶込みもみられる。今後形状分類などを通じて出自の検討が必要である。

(5)——筆者はそれに対し、東北北部では基本的に半地下式とならないことから系譜を中部地方に求めることに反論したことがある[八木2012-p100]。現在は半地下式を末期古墳の一類型として認めている。

(6)——礫櫛型の古墳群での周湊からの出土例として、五条丸支群の周湊のみは35基あるが、SZ054から須恵

器甕、SZ056から8世紀後半土師器高坏4点と赤彩脚付鉢1点、須恵器坏1点が密集して出土しているものの古墳周湊となるかははっきりしない。またSZ074周湊から8世紀前～中様の土師器坏、高坏、小形甕、甕が集中出土しているが、主体部の位置は調査区外にあり、周湊墓かははっきりしない。SZ134からは10世紀の赤焼土器坏2点が最上層(To-aを含む)から出土している。また西根縦街道古墳群では周湊17基中Fa-4周湊から8世紀代の土師器丸甕1点が、Eb-9周湊から11世紀のような器壁の厚い土師器坏1点が出土している。

(7)——日本海側に住居数が少ない理由として、堅穴住居ではなく掘立柱建物が普及していたこと、海岸部では集落の立地が現在砂丘になっているところにあったため集落や末期古墳が発掘されないこと、古代集落にかかる発掘調査件数が少ないということが想定される。そのようなことを割り引いたとしても、内陸部でも住居数が少ないこと、10世紀に津軽や米代川流域で爆発的な増加を確認することができることから、やはり住居数の少なさは否めない。

(8)——栗原等五地域のうち、登米にかかる杉山古墳群を除き、磐井と現岩手県に属する気仙には7～8世

紀代の群集墳が確認されておらず、堅穴住居跡も僅かな調査例にとどまる。現在の遺構空白地帯が当時の状況を示すものであるなら、南北の蝦夷社会境界の事実上の緩衝地帯になっていたことが考えられる。

(9)——杉山古墳は昭和30年に伊東信雄氏や草間俊一氏らによって調査されたが、報告書がなく、地元の図書館に謄写版刷りの概要と青焼き図面が架蔵されている。

古墳5基を調査しているが、青焼きは4・5号墳の2基のみで、1～3号墳の形状等は不明である。

(10)——三島古墳群については、気仙沼ライオンズクラブ1972『目で見える気仙沼の歴史』、本吉町誌編集委員会1982『本吉町誌』Ⅰ、気仙沼市史編さん委員会1988『気仙沼市史』Ⅱによった。

参考文献

- 安達訓仁 2015 「鳥矢ヶ崎古墳群 A1・A2 号墳出土遺物について」『歴史と文化』第53号
- 五十嵐聡江 2004 「『末期古墳』の展開とその社会的背景 (上)」『筑波大学先史学・考古学研究』第15号
- 五十嵐聡江 2005 「『末期古墳』の展開とその社会的背景 (下)」『筑波大学先史学・考古学研究』第16号
- 五十嵐聡江 2018 「陸中・房の沢古墳群と山田湾の古代社会」『古代』第142号
- 石附喜三男 1965 「東北地方北部における末期古墳の様相」『古代文化』第14巻第2号
- 石附喜三男 1966 「北海道南部における8世紀前後の墳墓とその系統」『古代学』第12巻第4号
- 岩田貴之 2016 「Ⅳ総括」『江釣子古墳群 (2013年度)』北上市埋蔵文化財調査報告書第120集
- 岩橋由季 2014 「東北地方における『肥後系』横穴墓の展開とその背景」『日本考古学』第37号
- 宇部則保 2007 「古代東北北部社会の地域間交流」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館
- 宇部則保 2019 「古代都母の地域様相」『北奥羽の古代社会』高志書院
- 河北地区教育委員会 (佐々木茂禎) 1972 『和泉沢古墳群』
- 栗駒町教育委員会 (加藤孝) 1972 『鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報』
- 黒沼和彦 2018 『蔵手刀の考古学』同成社
- 小井川和夫 1991 「桃生町山田古墳群・矢本町矢本横穴群出土遺物」『研究紀要』第16・17巻 東北歴史資料館
- 小谷地肇 2016 「末期古墳の展開と終焉」『日本考古学協会弘前大会資料』
- 佐藤敏幸・大久保弥生 2007 「宮城県の湖西産須恵器」『宮城考古学』第9号
- 佐藤敏幸 2007 「vi. 宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 佐藤敏幸 2010 「東北地方における7～8世紀の東海産須恵器の流通」『北杜』辻秀人先生還暦記念論集刊行会
- 佐藤敏幸 2019 「矢本横穴墓群」『第45回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 高橋和成 2019 「末期古墳の被葬者からみた古代北奥社会」『博古研究会2019年度研究大会資料集』
- 高橋千晶 1997 「岩手県の横穴式石室と前方後円墳」『横穴式石室と前方後円墳』第2回東北・関東前方後円墳研究会資料
- 高橋千晶 2017 「岩手県における古代墓制の展開」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所研究成果公開シンポジウム資料
- 高橋誠明・大谷 基 2008 「第3節 大崎地方の古墳時代」『古川市史』第1巻通史Ⅰ
- 高橋信雄 1987 「岩手県における末期古墳の再検討」『北奥古代文化』第18号
- 高橋信雄 1995 「岩手県の古墳時代」『図説岩手県の歴史』河出書房新社
- 高橋信雄 1996 「蝦夷文化の諸相」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版
- 田中則和 1995 「安久東古墳群」『仙台市史 特別編2 考古資料』
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 玉川英喜 1990 「岩手県内の円形周溝と方形周溝」『紀要』X 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 辻 秀人 1996 「蝦夷と呼ばれた社会」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版
- 辻 秀人 2016 「鳥矢ヶ崎古墳群と伊治公一族」『栗原市伊治城跡から読み解く東北古代史』東北学院大学アジア流域文化研究所公開シンポジウム資料
- 百々千鶴 2010 「宮城県の横穴墓についての基礎的研究」『北杜』辻秀人先生還暦記念論集刊行会
- 野村 崇 2000 「北海道式古墳」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂
- 林 謙作 1978 「『五条丸古墳群』の被葬者たち」『考古学研究』25-3

-
- 林 正之 2015 「東北北部『末期古墳』の再検討」『古代』第137号)
- 古川一明 1996 「北辺に分布する横穴墓について」『甘粕健先生退官記念論文集』
- 藤沢 敦 2015 「北東北の社会変容と末期古墳の成立」『倭国の形成と東北』東北の古代史2 吉川弘文館
- 松本建速 2006 『蝦夷の考古学』同成社
- 松本建速 2011 『蝦夷とは誰か』同成社
- 村田晃一 2002 「七世紀集落研究の視点(一)」『宮城考古学』第4号
- 村田晃一 2007 「V. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 村田晃一 2016 「D 総括」『御駒堂遺跡・堂の沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第244集
- 八木光則 1996a 「東北北部の終末期古墳群」『岩手考古学』第8号
- 八木光則 1996b 「馬具と蝦夷 —藤沢狄森古墳群出土の壺鐙をととして—」『岩手史学研究』No.79
- 八木光則 1996c 「蕨手刀の変遷と性格」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
- 八木光則 2004 「蝦夷考古学の地平」『古代蝦夷と律令国家』高志書院
- 八木光則 2007 「蝦夷と『律令』」『九世紀の蝦夷社会』高志書院
- 八木光則 2010 『古代蝦夷社会の成立』同成社
- 八木光則 2011 「古代北日本における移住・移民」『海峡と古代蝦夷』高志書院
- 八木光則 2012 「古代北日本の画期と移住」『新しいアイヌ史の構築 先史編 古代編 中世編』北海道大学アイヌ・先住民族研究センター
- 八木光則 2019 「北上盆地の古代村落」『北奥羽の古代社会』高志書院

(岩手大学平泉文化研究センター, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2021年3月16日受付, 2021年7月27日審査終了)

The Genealogy and Revolution of the Latest Stages Tombs (*Emishi-style*)

YAGI Mitsunori

This paper is a reexamination of the Latest Stages Tombs (*Emishi-style*), whose construction dates back to the 6th century—10th century period and is spread over the expanse from northern Tohoku to central Hokkaido. These tombs have been evaluated along the following three themes:

The first theme discussed in this study is the genealogy of the Latest Stages tombs. The Hachinohe area of Aomori Prefecture is lined with several hole-type Latest Stages tombs. These tombs consist of overhangs whose architectural design seems to have been replicated from pit dwellings consisting of horizontal stone chambers and furnaces that either sport no smoke flues or very short ones. It is believed that their genealogy can be traced back to the Joso region (Ibaraki and Chiba Prefecture) because their design, together with the dug holes on their sidewalls, seems to have been highly inspired from the Kanto-style tombs. The structure of long gravel laid horizontally across the opening of a furnace was adopted in the Isawa area of Iwate prefecture from the southern part of the Fukushima prefecture. The style of the hole is said to have evolved from the traditional hole-shaped graves and broadly influenced by the kofun culture of extended burial and tumulus. This influence is evident in the architectural style of the western Kanto region in the stone compartment, together with its riverside stones.

Although the culture of the Kanto provinces significantly influenced the establishment of the Ezo society in the areas north of northern Tohoku, there were few Kanto-style Haji potteries, which implies that not many people migrated from Kanto to this region.

The second theme involves a historical transition. As the number of large-scale clustered tumuli began plummeting since the latter half of the 8th century, the design of the Latest Stages tombs was changed to a style that no longer entailed its main part (i.e., the burial mound surrounded by a ditch or tombs encircled by a groove). Moreover, people began abandoning the idea of a communal burial area and started setting up a separate burial ground for each village or family. This transition stems from a reduction in the total number of pit dwellings in the latter half of the 8th century, which was a period of enormous change in the local communities.

The third theme is the author's recognition that the clustered tumuli in the southernmost part of the Iwate prefecture as well as the northernmost part of Miyagi prefecture (i.e., the area comprising

five counties, including Kurihara) are different from the stone compartment-style Latest Stages tombs in the Kitakami Basin. Regarding the construction of cluster of small mounded tombs, we can assume that the local residents took up occupational roles such as that of the local magistrate and adopted the funeral system of the clustered tumuli. They also assimilated with the immigration of the Kinohe (i.e., migrants from the Kanto and Hokuriku regions who were forced to work for the government), the construction of the castle fences, and the Thirty-Eight Years' War.

In conclusion, this studied the Latest Stages tombs to evaluate the formation and evolution of the Emishi society and its internalization of external cultural influences in the northern end of central Mutsu.

Key words: *Emishi* (蝦夷) society, Tohoku Region, the Latest Stages tombs, Burial Mound surrounded by a ditch, Cluster of small Mounded Tombs